
魔力無き王族の物語

吟遊詩人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔力無き王族の物語

【Nコード】

N5930V

【作者名】

吟遊詩人

【あらすじ】

彼は17年間生きてきてアウトドアよりインドア派デブでモテない人生を過ごしてきた。

そしてある日、彼はとあるデパートで火災にあい

そこで人ではない存在を目撃してしまう。

そこで彼は誤って死神に魂を奪われ、気がついた時には

彼は神の前に立っていた。そして彼は神と5つの約束のため

死神に転職し、魂を集め始める。そして

神との約束数の魂を集めた時彼は神によって5つの

願いを叶えてもらう事となる。そしてかなわれた願いは
転生先の体に受け継がれ、そして彼は第二王子という
体に転生をしてしまう。

彼はそこで王位継承権第三位の立場の元様々出来事に巻き込まれ、
彼なりに行動し、世界の運命と言う濁流に真っ向から挑む。

『報告、タイトル改名については活動覧に更新しておきました』

更新日は不確定で3日後だったり連続投稿だったり様々です。

キャラクター紹介 国紹介

主人公

桑崎・不一かみき ふいち転生後 クロイド・ライネ・クロイシス

エルダール王国

(現) 国王 クロイド・フォルン・クロイシス(51) 黄色の髪

王妃 クロイド・???・クロイシス (36) 白銀

の髪

王位継承権第一位 クロイド・リース・クロイシス(18) 金色長髪、頭の後ろで紐で髪をくくっている。

8歳 王位継承権第二位 クロイド・アレーネ・クロイシス(

16) 白銀の髪

王位継承権第三位 クロイド・ライネ・クロイシス(8)

白銀の髪

王位継承権第四位 クロイド・エルシア・クロイシス(

6) 金色の髪

世話係の爺 ??????年不明

兵部長 グレイン(?) 赤い長髪に剣の使い手、王国一と

まで言われている逸材。

エルデラ王国

国王 ?

王妃 ?

王位継承権第一位 レイデル・キアラ・クレール(8) オレンジ色の髪が特徴。

ミディール王国

クレイル
学園

キャラクター紹介 国紹介（後書き）

簡単なキャラクター紹介と地名を徐々に更新していきます

プロローグ

「死」それは人の肉体から魂が抜け出ること。体温が消え、すべての生体機能が停止すること。

・・・それは人々の解釈である。世界には人々には知られぬ魂を狩る者が存在する。

それは肉体から魂を切り取り取り地獄か、天国へ導く仕事。今日もまた名もない死神が

昼夜問わず人々の命を魂を回収する。

人々が寢息につく頃、夜の街空に黒い古ぼけた穴だらけのマントを身につけ暗闇の

色に染まる影が多く、死が溢れる病院の一室に窓も開けることなく通り抜けるように入り込んだ。

それに合わせて部屋の空気が刺すような冷気が変わる。

黒服の男は突然部屋の住人の前に現れ、懐から古ぼけた懐中時計を取り出し

「時間だ」

男は純白のベットに寝転ぶ、酷く老いた老体の前に出ると、どこからか

大鎌を取り出し両手に握り、よく通る声で老人に囁いた。

「あなたの魂を回収に参りました。よろしいですね？」

男の息は白く色を変え、靄を空中に漂わせる。

「迎えが来たようじゃな・・・構わん持って行ってくれ」

男はどこか悲し表情を浮かべ、大鎌を振り上げた。

「死後の貴方に・・・より良い幸運がありますように」

言葉と同時に大鎌は老人の心臓を貫き、紺青の閃光を上げると男は大鎌を抜き取る。

しかし、老人の体には大鎌の突き刺さったような傷跡は無く紺青に輝く球体が突き刺さった心臓のあたりから抜け出るようにして

部屋の宙に浮かんでいる。

男は大鎌を地面に突き刺し、懐から無数の文字が欄列して並ぶ空き瓶を取り出すと

漂う球体に向かって瓶のフタを抜き取りかざした。

男の持っていた瓶が突然空中に漂う球体を掃除機の吸引能力のよ

うに吸い取り、瞬きの間に球体を小さな瓶の中に回収した。

男は瓶の中に輝く紺青の玉をしばらく眺めると懐に収め、黒い古書こしょを取り出し、手でなぞりながら目的のモノを探しだす。

「秋山・龍一、68年の生涯を深夜2時43分……心臓麻痺により終える。罪状無し」

魂は天国へ輸送。つか、最後の仕事にしてはベタなやつだったなあー」

男は秋山と書かれた欄にサインを入れるとパツたんつと本を閉じ、軽く足を跳ねる。

すると男の影が空へ向かって駆け抜ける。

影は空気を裂き、暗黒の広がる空へ何処までもどこまでも登っていく。

男の住む領域、人には見えず、神々と死に触れる者しか訪れる事ができない

空間、生と死の入り交じる暗闇と光の分かれ道。

右は光、左は闇、それらの道を死神は迷うことなく導き死者を天国か地獄へ輸送する。

「右は天国、左は地獄」

男は雲の上に突き刺さるそんな看板を眺めながら右へと足を進める。

真っ直ぐ、男は光の方向へ進み、大きな門の前に到着すると足を

止め

門の片隅に存在する小さな建物の中へ入り込むと中に座っている男に声をかけた。

「門番リード、魂を天国へ導きに来た。門を開いてくれ」

椅子に座り灰色の新聞を手にくわえタバコをしながら男は立ち上がり壁に

かかっていた鍵を手取る。

「死神？2の仕事もこれで最後かい」

「ああーここまで来るのに二年もかかったからね。本当疲れたよ」

「惜しいねえーあんたみたいな優秀な死神は世界を探しても滅多にいないからねえー」

まあーお疲れ様」

男は煙草を咥えたまま扉の小さな穴に鍵を通すと、扉を軽く押し開ける。

しかし大きな扉は開かず、男の押し開いた人一人通れるような窓のような場所が開く。

「んじゃー行つてくわーまあーあれだ、またこの門を俺が通るような事があればよろしくな」

「ああー待つてるよ」

門番の男は手を振りながら細目で男の後ろ姿を眺め、どこか寂しげな表情を浮かべると

頭を何度かかき扉の外へと出ていくと、門の扉を閉じた。

男はそれを背に一面真っ白な空間に一本だけ伸びる道を足場に進む。

一刻の無音の空間を経て、男は無数の神々が鎮座する道を進み。

最も地位の高い神の部屋の前へと立ち尽くすと、

「入ります」

言葉と同時に白く無数の絵が掘られた扉が音もなく自動的に開かれ男はその扉の先へ足をすすめる。

部屋の中には無数の白い女神の石像が一本の通路に立ち並び

来客者を歓迎する。通路の先には巨大な椅子に腰を据える一人の老賢者の姿が男の視界に映り込む。

男はゆっくりとした足取りで白い空間を進む。そして老賢者とさほどの距離がなくなった頃、足を止め声を上げた。

「神様……俺はあの時の約束通り46万と4230の魂を回収したぞ。約束通り俺を転生してくれるよな？」

男はこの空間に一度来ていた。それは二年前……まだ男が桑崎かみき不ふ一いち

と呼ばれていた頃の事。

彼は肉脂肪の塊だった。身長170センチ体重127キロ。視力両眼ともに0.7

メガネをかけ、年中汗を掻くその姿は中年男性よりも悪く。おやじデブなどと

17歳の彼に言いかける同級生もいるほどに彼は太り容姿共に神に見放された

人生を送っていた。彼の唯一の得意分野はゲームやネットゲーと言った物だった。

7歳の頃ランデブーオンラインを制覇、ランデブーオンラインとは世界中の人々と

シューティング対戦をするゲームである。そのオンラインで不
は7歳という

年齢で数々の大人を負かし、世界一のプレイヤーとして輝いたのだ。

その後、シューティングゲームに飽き、三国志を元とした三国列伝というゲームに

運命的出会いをし、10歳から17歳まで発売された1から6のシリーズを買っては修羅モードを

プレイし、ゲームを極めんとモニター越しにプレイを続けてきた。そんな彼の運命を変えたのはセブンの発売されたその日、都内で

大きな火災事故があった時、

運悪くその火災の起きたデパートでソフトを購入していた彼は目にしてはならない物を

燃え盛る火炎の中目にしてしまう。

それは黒い衣に凍てつく空気を吐き散らす人ならざる存在。

言葉にあわらすのなら、死神、つという言葉が最も適切で彼自身それが死神だと

思えた。そしてその死神が瓦礫の下敷きとなった人間の体から何かを取り出し

瓶に入れるのが見えたのだ。

そこで不一は思わず声を漏らし、その死神と目があってしまう。

死神は一瞬慌てるような様子であたりを確認すると、突然髑髏のような形相で

持っていた大鎌を男の体に斬りつけた。

その瞬間、不一の体は何かが抜け出るようにしてガタンと地面に力なく倒れこんだ。

彼の意識が闇へ落ち、再び光に包まれた時、彼は白い空間で一人の男の前に

浮かんでいた。体も無くただ、魂の状態で彼は浮かんでいたのだ。不一には何が起こったのかトンと理解できなかった。

思い返すようにこの姿になる前の出来事を頭に回らせる。

すると、死神や鎌の事が徐々に思い出され、斬られた事を最後に思い出すと彼の前に

静寂の終りと共に声を上げる老賢者。その姿は長い白ひげに長髪の白髪

知性を纏わすその凜々しい顔立ちは絵本や神話の物語で語られる神その物だった。

「少年よ、死んでみた気分はどうだ？」

老人は表情ひとつ変えずそう声を吐く。

「やっぱ俺死んだのか……」

「ああー少年は死んだ。しかし、それはこちら側の誤りによって起

こった

出来事なのだ。少年が死ぬのは後20年後、肥満による窒息死
少なくとも後二十年は生れきるはずだった。しかし新米の死神
が誤って君の魂を刈り取ってしまった」

「肥満で窒息死って………残念な死に方だね」

「そうでもないさ。世界では君以上に残酷な死に方をする人間が物
の数ほどいるのだから」

「まあーそんなもんだよねー人生なんて」

「そう落ち込むではない。少年には2つの道を用意してある。

だからこそ我がわざわざお前をここに導いたのだからな」

「2つの道？」

魂となった不一は尋ねるようにしてそう声を上げると老人が杖を
ドンつと強く

地面を叩き音を上げる。

「まず初めの道はこのまま天国に向きそのまま転生すること

これは生きていた頃起こした犯罪や人にもたらす幸運を計算し

善悪の数値が引くければ地獄へ高ければ天国へっというふうにな
る。

基本的に自殺や理由のない殺害は地獄行きの対象となる。親殺しも

同罪である。その他小さな罪を犯しても後にその付けを払えば

天国行きになる。罪を全く犯していない人間は自然と天国へ導か
れる事となり

その後転生することになる。だが、少年は20年も死が早まりな
おかつ

残念な人生を送ってきたようだからこの神直々にもう一つの道を
用意した。

少年よ、それを受ける気はあるか？」

「話によるかな」

「ふむ、最もだ。ならば言うぞ？ 少年には46万と4230の魂
を死神となつて

回収してもらおう。もしもそれが回収できたならば、この世界とは違う世界

そこで新たな人生を歩んでもらうこととなる。そして転生のさいに5つの願いを聞き届けよう」

「その願いつてどんな事でもいいの？ゲームの主人公と同じパラメーターにしるとか美形にしろっとか

魔王なんてものにしろとか、なんでもさ」

「ああ、構わんよ」

「なら・・・」

それが二年前出来事、彼は驚くほど早く魂を刈り取り上位死神の仲間入りを果たした。

そして？2の称号と共に今日この日、神との約束を果たすべく彼はその場に訪れた。

「この二年で少年は我ら神をも驚く速さで魂を回収し、そしていま最後の魂を私の

前に差し出した。約束は果たそう。一つ・・・三国列伝に登場する人間のパラメーターを

良い部分だけ受け継いだ状態で転生すること。二つ・・・転生後の姿は美形で有ること

三つ・・・世界に存在するすべての武器の使い手で有ること。四つ・・・意識すれば空を飛べる事

五つ・・・金には困らない人生で有ること。以下の事でいいか？」

「ああーそれでいい」

老賢者の言葉に男は頷きそう言葉を放った。すると、空間に閃光が迸り、男はその光の中へと魂と共に吸い込まれ空間から姿を消した。

魂は世界を超え、時空を超えて、とある世界へ導かれた。

そして、そこで、一人の母体の中へと吸い込まれるようにして入

り込み。

.....

「陛下！ 三人目となる陛下のお子が先ほどお生まれになりました！ 陛下！」

王妃様の元に急いでください」

老婆のような面持ちの使用人が王室を訪ね、額に汗し目を見開いたままそう声を上げる。

それを聞いて、国王と思しき男が机に広がる書類の上に両手を乗せ、立ち上がると

そわそわしたように左右に動き。

「ああーどうしよう。ああーえつと何がいるかな、えつと」

「落ち着きください。陛下そんな姿を子供たちに見られてしまったらいらぬ心配を子供たちにかけてしまわれませんか？ 今は落ち着き

王妃様のもとへ.....」

プロローグ（後書き）

文章力の乏しい作者ですが。今後ともよろしくお願いいたします。
毎回更新時間は19:00です

第一話：幼少の頃（前書き）

幼少編です。1〜2多くて3話程度を考えております。
其の後青年編を書いていく予定です。

第一話：幼少の頃

肌寒い風が吹き抜ける個室で少年はフツと目を覚ました。

その面持ちは肩ほどまでに伸びた白色の髪に透き通るような青色の眼

鼻や口骨格さえも整い、雪色のよつに清らかな何者にも侵されない純白の肌、正しく美少年である。

少年、クロイード・ライネ・クロイシスは8年の月日を王宮で過ごしていた。

冷える部屋の空気をソッと吸い込み、ライネはテーブルに置かれた水を手にとると

コップ一杯に水を注ぎ込み、乾いた喉を潤わせた。

「今日も寒いなー」

よく通る声と共にガラスのコップが音を立てテーブルに置かれる。ライネは部屋端に置かれた羽織を手に取りそつと肩に乗せると、

風の吹きこむ

ベランダの扉を音を立てながら押し広げた。

それと同時に部屋中に空気が押されるようにして一斉に吹き抜けた。

ライネは一瞬よろめき、後ろへ二歩三歩と下がり風が止んだと知ると

再びベランダに足を踏み入れた。

白色の床と無数に置かれた花々が空間を彩る中、ライネは塀の上に飛び乗り

城下町の様子を伺うようにして覗き込んだ。

「爺のやつ何時になったら俺を自由にしてくれるのやら。全くもって不自由な生活だ」

ライネはそう言って口を開きながら、見惚れるようにして城下の街を眺める。

街の周りにはオレンジ色の光が溢れ、暗闇を照らしていた。

「これさえ完璧にマスター出来れば、俺も爺の監視網から抜け出ることができると……」

ライネはそう言いつつ、白い床から体を一瞬浮かせて見せると、ひどく疲れたように

冷たい冷気と共に息を吐いた。

「やっぱ、疲れるなあーコレ……」

世間では八歳という扱いになっているクロイード・ライネ・クロイシス。

しかし、実際は20歳の男、不一の魂がクロイード・ライネ・クロイシスの

体に記憶を持ったまま転生し、精神的には28歳なのだ。

彼が記憶に目覚めたのは転生して3年の月日が流れた頃だった。

実質的には25歳と言うことになる。

母上や父上の寵愛の元、子供を装い5年の月日がたった。

その合間を塗って空を飛ぶ練習は続けてきたが、今のところ数秒程度浮かぶつという行為にしか至っていない。

言葉を覚える事や文字や歴史、礼儀作法など様々な事を

この五年間学び、そして今もまだ学び続けている。

再びライネは白いベランダを抜け、自室へと帰り、大きな月夜に照らされる

ベットの上に倒れこむ。

エルダーダル王国、4つの国々を収める偉大な大国である。

それが爺の口癖だった。

「ライネ様？ 聞いておられますか？」

ドンッと黒板を叩く音が部屋に反響し図書館のように敷き詰められた

本棚から埃がわずかに溢れる。

ライネはその音と共に浅い眠りから目を覚ました。

「もちろん聞いてるよ」

しかしライネの額にはくつきりとした黒ずみが輪のようにして刻まれている。

それを見た初老の老人は表情を歪ませ口から火を噴くようにして抜刀を浴びせる。しかしそれは刀ではなく杖。杖は綺麗にライネの肩に

二度ほど当てられライネは肩に軽い痛みを覚えつつ老人の顔を覗き込みながら

透き通るような声で言葉呼びかけた。

「そろそろ俺、いや世にも剣術の授業を受けさせてくれない？」

歴史の授業や礼儀作法はこの5年間嫌気がさすほど学んだよ」

それはライネの本音だった。この五年間否応無しに歴史と礼儀作法言葉や文字をこの妖怪腐れジジーの元で学び、歴史の細かい部分まで

丸暗記している自信がライネにはあった。礼儀作法に関しても

8歳の少年に求める作法などが知れている。ライネは心底この授業に嫌気が指していたのだ。

老人は何か元足りなさそうにして肩を縮めるとしわがれ声で口を開いた。

「ライネ様、王位継承権代一位の兄君リース様や王位継承権代二位のアレーネ様が

剣術を学び始めたのは9歳の頃ですぞ？　ライネ様はまだ8歳です。

焦ることはありませんぞ？」

兄リース、姉アレーネ、二人はライネの兄妹であり

国を背負う確率の高い地位にいる人間、しかし姉アレーネは

王位など微塵も興味が無く、今は収めている国の一つに存在する魔道学園で魔道学を学んでいる。兄リースは17歳という年で

分隊長以上の剣術と知略に長けた才子である。王城内では彼の美貌や人柄の良さが大勢の支持を得ている。特に彼に話しかけられた

女は一夜にして彼の心を射止めようとバーゲンセルのように彼の個室に押しかける。それがパーティーや祝の席だとその数が二倍や三倍にまで

膨れ上がると言われている。そんな兄を持った弟の気持ちを察して老人は焦る

っという言葉を使ったのだろうか、ライネは微塵も焦りなど感じていなかった。

「爺、俺は別に焦ってなんかいないよ？ 兄様が王位を継ぐならそれでいいと思うし

俺はただ、純粹に剣を振りたいんだ」

初老の老人の目をライネは見据えるようにして落ち着いた声音で言葉を発した。

「ライネ様……わかりました。至急、兵部長グレインを連れてまいりましょう」

「爺……いいのか？」

「この爺、王に教えて50年、今の国王フォルン様が幼少の頃から世話係を仰せつかった

身、人の心を、人の本心を感じ取る能力に関しては誰にも負けぬ自信がございます。

ライネさまの言葉には熱い息吹を感じました。あの王の子であると改めて

思いました。いいでしょう。その思いに免じて、8歳からの剣術授業を許しましょう

王には私が申し出をしておきます。王宮広場でお待ちください」「わかった」

王宮の広場にはわずかだが人だかりができていた。

それは10代から40代まで年齢層は様々である。

周囲を囲むようにして白い棒状の足が壁を支え広場の中央には小さな噴水が

音を立てながら流れている。地面には石畳が並び、花々も至るかしこに置かれている。

そんな中、ライネの声が漏れ出る。

「手加減はいりません」

腰に据えられた豪華な彫り物がされた鞘から剣を抜き出し身構えると、視線を前の男に向ける。

「これはこれはライネさま、生きの良い事おっしゃる。しかし仮にも私は

この王国の兵部長を努めている身、手加減無しとなるとライネ様の命が危うくなりますゆえ

真の剣は使用せず、私は木刀のみでお相手することをお許しください」

「なら私も木刀に……」

糸のように細い赤髪を腰まで伸ばすおたふくのような仮面をつけた

男が首を左右に振り、ライネの言葉を止めた。

「ライネ様はその剣で向かってきてください」

「それでは不利だろ？」

切れる剣と切れぬ剣明らかに戦いに置いて大きな差になるに違いないこの差を

男はどこか楽しんでるようにして言葉を仮面の奥から放った。

「不利ですか……ならば私に一太刀浴びせてみてください

もしもその刃が私を傷つける事ができたのなら、私もあなたと

真の剣でお相手しましょう」

ライネは握り締める剣を更に強く握りしめ、抜刀を躊躇なく男に振りかざした。

しかし男は仮面の奥で一瞬笑い、ライネの一太刀を受け止めた。

「お分かりいただけましたか？」

ライネは握りしめた剣を眺めながら何が起こったのか必死に理解しようとしていた。

ライネの放った剣は確かに木刀に接触した。しかしその後が理解できなかった。

触れたはずの剣には強い力がかかっていたはずだが、木刀に触れた瞬間

剣の力がまるで元から無かったかのうように押し殺され、力を込めていた

腕の力すらどこかへ分散されたようになってしまった。

それどころか、木刀には何一つキズ一つついてはいなかったのだ。

「何をした？」

「いえ、軽く受け流しただけですよ」

涼し気な声でそう男は言い放つと。

「わかった。これだけの差があるならこっちも遠慮なく踏み込める」

「ええ、さあー始めましょう」

男の言葉と同時に再びライネは体を加速させ、茶色の衣装を風になびかせながら

一太刀一太刀を男に浴びせる。浴びせるたびに男は力をどこかへ分散させ

力を殺し、スラスラと軽く剣を躲す^{かわ}ライネは一心不乱に

剣を振りかざし、幾度もなくそれを繰り返す。

そして開始から4時間ほどがたった頃、ライネはその日一番の一刀を

意識の薄れる中で男に振りかざした。

それを見てた男が不意に声を漏らす。

「クッ」

その瞬間男は持っていた木刀を数センチ動かし、剣の進路を変える。

剣は木刀と触れた瞬間、木刀の端を削りながら地面に深く突き刺さった。

「今日はここで終いにしましょう。後、ライネ様、最後の一刀あの一刀を忘れずに、あれには才を感じました。もしかするとライネ様はご兄弟の中でも剣才があるのやもしれませぬな」

「え？ 終わり？ まだ俺は行けるぞ？」

「そうですか？」

仮面の男が突然ライネの足元に木刀を軽く当てる。

するとライネは突然倒れこみひっくり返った亀のように動けなくなつた。

「相当足に負担をかけていたのでしょう。続きは明日です

今日はゆつくりその体をお休めになられたほうがいい

私は逃げませんから」

「あーわかつた」

ライネは頭上に見える仮面の男を眺めながらふと思つた。

（あれだな、確か5つの願い事で俺すべての武器の使いてになるとかなんとかお願いしたんだよな？ なのになに？ どうして俺はこの人に負けたわけ？ もしかしてあれ？ 今は体が幼すぎて力が十分に使えないって事なのか？ そうだったら

飛べない理由もわかる。それにこの顔だつて将来美形間違いないだし

時間と共に色々とスキルアップするのもかも。うん、今はそう思い込もう）

第一話・幼少の頃（後書き）

誤字、脱字があればご報告お願いいたします。

第二話：弔いの日

重い鐘の音が天高く反響し暗闇の国に街に響き渡った。

それと同時に街には複数の黄金色の光が列をなし、川のようにして光は目的地を目指す。

「ライネ様、皆様お集まりになっておられます。ライネさまも中央広場へお急ぎください」

暗闇に閉ざされた個室の扉をゆっくりと開き蝋燭を片手に若いメイドがベランダで羽織を着飾った

白銀の髪を夜風に踊らせるライネに声を上げた。

「わかった。すぐに行くよ」

メイドは一瞬視線をライネに向けるが目が合った途端に目を背け慌てるようにして

一礼すると部屋を出ていった。

それと同時に夜の闇が広がる。ライネ暗闇に目を凝らし、ベットの上に広がる

ローブを身に纏うと、手探りで扉を探し始める。しかし、扉のあたりには

月光の光は届いておらず、そこだけ完全な暗闇に包まれていた。

目をつむっているのかそれとも開いているのかどちらなのかわからなくなるほど

それは絶対な闇。ライネは前方に手を押し出し壁を探し始める。

しばらく闇と対峙した後、壁を見つけ、冷気を帯びた壁に手を載せた。

暗闇の支配する個室にゆっくりと扉が開かれる音が漏れる。

ライネは扉を超え、通路に出ると、左右を確認し右へと足を進めた。

普段は王城のそこかしこに蝋燭やランプが置かれているのだが、今日は特別な祝いの日なのでそのランプや蝋燭を吹き消してある

のだ。

複数の足音が廊下に溢れる中ライネは音の方向へ足を走らせる。徐々に暗闇に包まれていた通路は複数の兵士の持つランプによって暖かくほのかに空間を

照らしていた。そこではすでに複数の人々が集い小さな扉の先へ足を踏み入れつつあった。

踏み入る者踏み入る者すべてが貴族、豪華な装飾の施されたドレスを着飾る

若い娘たち、静かな面持ちで扇を両手に握り締める貴婦人や紳士たち。

その場には一般平民とよべる地位の者は誰一人見当たらなかった。ライネはその列の中に紛れるようにして進み大広間の四階部分へと人に揉まれるようにして到着した。

中央を囲むようにしてオペラハウスのように椅子が置かれ、数人の兵士があたりを警戒しながら

巡回しているその場所は今夜祝いの儀が執り行われる会場だ。

ライネは更の上へと続く階段を登り無数の兵士の監視を抜けるとその会場で最も高い場所に存在する

階へと辿りついた。数本の蠟燭が灯された空間には6つの椅子が立ち並びすでに椅子の主は一つを

を空席にして座り込んでいた。ライネは迷わず空席の席へと向かい、音も無く席へと座った。

「あれだねえーライネは毎年ギリギリの時間でここへ来るね」

それは透き通るような優しい声、誰もが良い王と認めるこの国の王。

クロイド・フォルン・クロイシスその人の声だった。

「父上、少し暗闇で道を見失ったもので……」

「ライネは毎年毎年同じ間違いを繰り返しているね将来が心配だよ」背筋まで伸びる長い黄金色のしなやかな髪を黒い紐で結ぶ絶世の美青年が

中央に佇む王の椅子のすぐ隣で声を上げた。

「あらー可愛いじゃない。それに私の弟ながらホント惚れ惚れするほどの

面持ちになりつつあるし。リース兄様見たく完璧すぎる人よりはきつと女の子にモテるわよ」

美青年の隣に座る白銀の雪のように白い艶やかな長髪の持ち主が声を発した。

「あらあら、リースちゃんも十分女の子にモテると母さんは思っけどなあー」

柔らかな口調で二人を嬉しそうに眺める国王の隣に座る雲のように白く

長く伸びた髪と高貴な空気を纏った女性がそっと口になると、二人は突然黙りこんだ。

「お母チャマ、今日はピカピカ起こる？」

幼い声が王のとなりに座り込む女性に呼びかける。

「そうねえーエルシアちゃん、今日は死んでいった魂をそらに返す特別な日だから

きつとピカピカが見れると思うわ」

「ほんと？」

「ええ、本当です」

幼い声と優しいげな声が入り交じったその瞬間、再び大きな鐘の音が空間に反響し

暗闇の広がる空へ響いた。

それと全く同時に人々は手を握り祈りを捧げるように目を深く闇へと落とした。

沈黙の後、祈りの声を告げると、広場の中心に魔道士たちが集まり空中に魔方陣を

走らせるのがかすかにライネの視界に写りこんだ。

そして、次の瞬間、魔方陣から青色の光が放たれ、真っ直ぐ天井に備え付けられた大きな

クリスタルの中へと消える。それが幾度と無く繰り返された次の瞬間……。

クリスタルは無数の光を暗闇に反射させ、次々と青色の小さな玉がクリスタルから漏れ出し始め

瞬く間に広場には青色の玉が数百数千と放たれた。

それらを見ていた者たちが祈りの言葉を再び告げると青色の玉は平民のはいり込んできた道を

通り、外へ夜空へと消えた。それはまるで人の魂のようにもライネの目には写った。

「これで今年1年も終わりを迎えたってことだね」

これは一年間で命を落とし漂っていた魂をそらへ返すといった

この世界に古くからある伝統行事である。

一年の終の日、僅かな光だけでブルークリスタル、通称青い棺の前で

祈りを捧げ、弔いの火をクリスタルに放ち、魔力を蓄えたクリスタルは限界を超えると

小さな玉のように形を変化させた物を外へ吐き出し、空へと消える。

それを魂に例えてこの世界の人々は一年の幸福と神への感謝を込めて祈るのだ。

第二話：弔いの日（後書き）

今回は一睡もしてない状態で小説を書いてしまったため

文章がかなり弱くなりました。次回からは自分に余裕を持って書きたいと思います。

第三話：孤独な王 前半

祝の日を終えて3日たった頃……王宮内では様々な料理が通路を渡り会場へと運ばれ

会場ではメイドたちが貴族たちが零した料理を獲物を狩るように素早くそして悟られぬように

料理を回収する。それが彼女たちの仕事であり、役目なのだ。

ライネは純白のテーブルクロスに零した料理を自らハンカチで包もうと手を伸ばした。

しかし、ライネの手は細く茶色毛の髪を白色のメイドの帽子で隠したメイドによって停止させられた。

「あ、あの……これは私ども使用人の仕事です。その手をお食事で汚すことはありません」

顔を背け、細い手で料理を回収しながらフリルのついた黒いスカートを宙になびかせ

背にして150〜160センチの彼女にライネは声変わりを終えていない幼い声で言い返した。

「俺が落としたんだから、俺が始末するよ」

メイド姿の彼女はどこか面倒を避けるように素早く散乱した料理を片付け始めた。

そこで背後からよく聞き及ぶ柔らかかな声が聞こえ、ライネは思わず振り返った。

「ライネ、少し頼みたいことがあるんだが、いいかな？」

黄金色の長い髪を左右に分け微笑むようにしてライネを見据える父の姿がそこにはあった。

しかしその目は深く閉ざされ、瞳の色すら伺う事ができない。何より2つの眼に沿って

一筋の傷跡が瞳を開くことを許さない。その顔をライネは幼い頃から見てきた。

過去に何があったのか、どうしてそんな傷を負ったのか、それはわからない。

優しい父なら何があったのか聞けば柔和な目にゅうわで語ってくれるだろう。

しかしそれをライネはしない。何がどうあれ、その時その瞬間に視界を失ったのだ。

色を我が子の顔すら暗闇に消えたのだ。悲しくないはずはない。だからこそライネはその言葉を口にしない。

「父様から頼みごとですか？ 珍しいですね」

ライネは微笑みながら笑う父の姿を見つめ言葉を放った。

「いやーそれがね、これから統合国のエルデラとミディールの国王たちと個室で国の

行く末について話し合うのだが……エルデラの国王には一人娘のレイデル・キアラ・クレール

と言うライネと同じ年くらいの娘がいるのだが、その娘の相手を私たちが会合をしている間だけ

面倒を見てくれないか？ 小一時間ほどで話し合いは終わる予定なのだが……どうだい？」

「別に構いませんよ……ちょうど暇を持て余していましたから」

灰色の衣に緑や白の小さな装飾が施された服を着こむライネが丁寧な言葉と共にそう返事を返す。

「フォオルンの息子よ、我が娘を頼むぞ」

二人の男女が父上の背後から現れ、一人は父上とさほど年齢差がないように思える紺青コンセイの髪に

緑色の眼、凜々しく気高い空気を纏った男。もう一人は1200130ほどの身長、首元まで伸びる

橙だいだい色の髪と若草色の瞳を持つ少女。彼女を彩るドレスは髪に合わせたかのように

オレンジ色に統一され、首元にかかるネックレスには一粒の宝石が埋め込まれている。

その姿からしても明らかだった。彼女は両親に寵愛されて育てられてきたのだと。

「わかりました。キアラ様の事は私が責任を持ってお守りします」

「頼んだよ。ライネ」

父上の手がライネの頭をなでるようにして触れら。ライネはどこか嬉しげに頷く。

続いて、エルデラの王が父上の離れた後を伺うようにしてライネに耳打ちした。

「フォルンの息子だ、過ちは起こさぬと思うが、娘に手を出したときは……」

その後の言葉は聞くに堪えないけれどどこから国の存亡に関わる内容だった。

それと同時に体にブルッと電流のように悪寒が走った。

「分かりました」

見せかけの表情を浮かべ、会釈する。

しかし、ライネは心の中では子犬のように泣いていた。

（おっかねえーこの人ほんとにおっかねえー娘のためなら

戦争だつてやりかねないぞ……マジで……）

「では娘を頼んだぞ」

男の低い声音が周囲の人の声を打ち消すかのように響き、父上と共に男は通路へと消えた。

ライネは視界の先でソワソワと顔を動かし落ち着きの無い少女に顔を背け頬を軽く描きながら

場に残った重い、堅苦しい空気を打ち砕くかのように言葉を発した。

「えっと……まずは自己紹介が先だよな。俺の名前はクロイード・ライネ・クロイシス」

この国の王クロイード・フォルン・クロイシスの息子で王位継承権第三位の息子さ、

だから気を使わなくていいよ、というか気を使ってるのは俺の方

っていうか

君は王位継承権代位一位の言わばお姫様なわけだし。アハハ俺何言ってるんだろ」

言葉が空回りし、余計な事を口にしてしまったとライネが思った瞬間、少女は

どこか嬉しげに緊張の糸が溶けたように淑やかな笑を浮かべ、柔らかな声で

ライネの目を見つめながら声音を口にする。

「どうやら貴方は他の人々とは違うみたいですね。だって……・裏表がないんですもの」

その表情は本当に嬉しそうに笑っていた。

彼女の言った『他の人』とは彼女に媚びへつらう貴族たちの事だろう。

ライネ自身は王位継承権第三位である地位からして彼らとの関わりは少ないが王位継承権代位一位のリースは

多くの貴族たちと関わりを持っている。後の王になる者に媚びるのは人の性であり

生き残るためには必要な手段なのかもしれない。だからこそ王は孤独であり

仮初の言葉を笑を見定める目が必要なのだ。ライネは昔のリースが言っていた言葉を思い出した。

それはまだライネが6歳だった頃の出来事。

兄の15歳目の誕生日、王宮では様々な貴族が招かれリースを祝っていた。

祝の会が行われ始めて1時間ほどがたった頃、リースは一人ベランダで夜空を眺めながら

どこか悲しげな表情を浮かべていた。

「兄様？　どうかしたんですか？　こんなに大勢の人が兄様を祝っているのに

兄様はどこか悲しいそうだ」

「ライネか、僕は君が羨ましいよ」

「え？」

いつもは他人のことを羨ましいなどと口にする事はない兄がそう口にした。

「どうして？　僕は王位にも付けないし兄様みたいに将来を有望されてるわけでもないよ？」

「どうして？」

「ライネ、国王という地位を継ぐということは自分から孤独になるということなんだよ……」

「でも、兄様にはこんなにも祝ってくれる人がいるじゃないか」

「この会場に来て私の事を本当に想う者は虫の数ほどいないよ。」

「この世界に生息している龍ほどの数しかね」

「龍？」

「数人しかいないって事だよ。だから僕は人を見る目をより強くより確実に鍛えなくてはならない」

ライネ……僕は本当に君が羨ましいよ」

それが兄の悲しげな言葉だった。ライネは視線の先に佇む少女を見つめあの時のリースの面影を少女に重ねた。

しかし、彼女にはあの時兄の表情にはなかつた笑が彼女にはあった。

どこかそれが嬉しくて、ライネは表情が緩んだ。

「私は……レイデル・キアラ・クレール。キアラって呼んでもらっても構わないわ」

そのかわり私も貴方の事をライネと呼んでも……いいかな？」

「別にいいよ……えっと、キアラはやっぱこう言うパーティーみたいな物が好きなのかな？」

左右にゆつくりと首を振り、キアラは低い声で視線を地面に移し。「正直なところ私は華やかな舞踏会とかこういうパーティーは嫌い

なの……

どちらかと言うと、花を見ていたりメイドたちのやっている花あそび眺めていたり

夜空に広がる星を眺めている方が好きなの、父様の前では絶対に言えないけどね」

「そっか、俺も正直こういふ場所は嫌いなんだ。なんか気まずいっていつか……」

自分の世界じゃない見たいな……そんな感じがしてさ」
「私たち少し似てるのかもしれないね」

キアラは嬉しそうに微笑みそう口を動かした。

「なら、キアラなら俺の知ってるあれも気に入るかもしれない」

「あれ？　なんか気になるなあ……それって物？」

「近いけど違うね、とにかくさ」

「え、ちよつと何を」

ライネは小さな手のひらを少女の手首へと持って行き、掴むと少女の声を無視して

強く腕を引き会場を二人は飛び出した。

第三話：孤独な王 前半（後書き）

今回は二本にわけ前半と後半で更新します

後半は2011/08/10 8時に更新いたします。

第四話：孤独な王 後半

「あと少しだ！」

小さく灯された蝋燭が立ち並ぶ寒空の風が吹き抜ける廊下をライネは少女の手を引きながら走っていた。

月夜の風は冷たく二人に吹き抜ける。

しかしライネは歩む足を止めない。少女も嫌がる素振りを見せるどころか目の前に広がる景色を楽しんでいる

ような表情を浮かべ足を走らせている。

左側には崖が広がり人の胸辺りほどの壁を超えると暗闇の広がる闇へ落ちてしまいそうな危険な通路が続く。

そこで通路の終がライネの目に写りこんだ。

「見えた……あの扉の先に俺の好きなモノがあるんだ」

振り返り彼女の顔を覗き込む。その声を聞いてキアラも好奇心が高ぶったように輝く瞳で頷いた。

それは木製の古い扉。ライネはゆっくりとその扉を押し開いた。

音と共に扉の先から強い風が吹き抜け二人の髪を宙へ踊らせる。

「何？」

キアラの声が漏れた瞬間、扉の先から黄金色に輝く光が複数の古ぼけた本を

照らし、空間を黄金色に染め上げているのが二人の視界に映り込む。

光は部屋にある窓の外から漏れでている。

「あの光は……?」

「蛍だよ」

「蛍？」

「勝手に俺がつけた名前なんだけどね。本当の名前は知らないんだ。でも多分これは虫だと思う」

「でもこれがライネの見せたかった物なの？」

「そうさ、特にあの窓の先の景色はたぶんキアラも感動すると思う」
ライネは再びキアラの手を取り、窓のそばまで歩みよると扉をそつと開いた。

漏れ出していた光は更にその輝きを増し、二人は一瞬目を閉じると窓の外に広がるその景色を眺めしばらのく間、沈黙が続いた。

それは――夜空に広がる黄金色の小さな玉、それが群れをなし暗闇の広がる大地を太陽のように照らしていた。

暗黒に包まれた闇を光が照らし川を映し出す。黒色に染まる崖を黄金色の宝石のように輝かせ世界を光に包み込む。

その光景はあらゆる気持ちから開放してくれる不思議な力を持つていた。

ライネは彼女の心に眠る孤独を少しでも和らげることが出来れば、そう思いこの場所に連れてきたのだ。

「あ……」

少女は泣いていた。ライネは笑ってくれてる思いここへ連れてきたのに

彼女は白い頬を紅色に染め上げ泣いていた。

「どうして泣いてるんだよ。ここは笑うところだろ？」

女を泣かせた状態でこの程度の言葉しかかけられない自分にライネはうんざりとした。

「えっと、大丈夫………なんだか、感動して………涙が止まらなくなっちゃったの

ここまで来るのにいろいろなことを考えて、父様のいうことをちゃんと聞いて。

いろんな人の顔を伺って私は生きてきた………でもなんだかそんな生き方が急に馬鹿バカしく

なつてきちゃって………泣けてきちゃった」

彼女は何度も、何度もその小さな腕で弱々しい手のひらで溢れる涙を拭い

それを止めようとする。しかし拭いても拭いてもそれは止まらなかつ

た。

それが止まるのは十分ほどたってからだった。

「やっと私の涙も枯れたみたいね……」

冗談交じりにそうキアラは言葉をそつと吹いた。

三十分間何も言わず、ただ彼女を見ていることしかできなかったライネはホッと胸をなで下ろすと

開かれた窓をそつと音もなく閉ざした。

「俺は何も出来なかつたけど……感動した？」

彼女は即答し頷いた。

「うん」

「なら、よかった。それじゃーそろそろ戻ろうか」

「うん」

そのまま二人は部屋を後にし、崖広がる通路を進む。

歩くこと数分……まだ崖の広がる通路に一人の女が三人の男を引き連れて

月夜に黒いローブを反射させ影を作り佇んでいた。

しかしライネはそれに警戒の眼差しを送る。

この時間、そしてこの通路で人にすれ違う事は今まで一度もなかった。

それどころか蠟燭の火を誰がつけているのかそして誰がこの場所を管理しているのか

すらライネは知らない。しかし視界の先に佇む者たちは兵士でも貴族でもない

それはまるで盗賊のような殺し屋のような服装をした連中。

「あんたたちこの城の人じゃなさそうだね？ 何者だ？」

声は通路に反響し、冷たい息を白く変貌させる。

「死にゆく者に名乗る名などない」

茶色髪が風に揺れ、青色の瞳が月光に照らされ輝くと女はどこからか剣を抜いた。

しかしその顔にライネは見覚えがあった。

「何？ あれですか？ メイドさんは人殺しもやるようになったんですか？」

会場で零れた物を拾ったあのメイドがあの時とは違う口調で表情で現れ、剣を闇に振るわせた。

「・・・・・・・・」

無言のまま女は剣を前に突き出し背後に闇のように溶け込んでいた男たちが一斉に向かってくる。

それを見たキアラは怯えるようにしてライネの背の後ろへと体を隠し小さな体で震えている。

「大丈夫だって、キアラは俺が守るからさ」

コクリッと彼女は頷くが彼女の表情には恐怖が満ちていた。

「下がってて、奴らは俺が・・・」

ライネは足に仕込んでいた剣を素早く取り出すと、鞘から剣を抜き取り身構える。

男たちは剣を床にこすりながら鉄の音を反響させ向かってくる。

ライネにとつて真剣でのやり取りは今回が初めてだった。

空気と殺気が心を体をすくませ、動いてもいないのに息が乱れ心臓の鼓動が何度も何度も

胸に響き渡るのをライネは感じていた。

「こんなところで死んでたまるか！」

数人の男の剣を刃に触れた瞬間起動を逸らし地面に突き刺すようにして叩きつける。

男たちは一瞬何が起こったのか理解できず浅い声を上げた。

「な・・・・・・・・」

声と同時に男たちの手足が皮膚をえぐるようにして傷ついた。

赤色の水滴が通路に広がり、三人の男が一斉に苦痛の声を上げる。

「うあああああ」

「痛えーちくしょー」

「何なんだよこのガキわーちくしょー足が・・・・・・・・」

地面に横たわる男たちはえぐられた足を抑えながら地面に龜のようにしてへばりついていた。

徐々に血が流れ、意識を失う者まで現れる。

「少しはやるようだねえーだが、お前もその娘もそしてこの国の王もエルデラの王もミディールの王だって

今日死ぬんだ。これは運命……一切変えることのできない運命なのさ」

女は突然全身から殺気を息をも許さない空気をその空間に走らせそして気がついた時には剣を握る片腕に女の剣が突き刺さっていた。

片腕に鋭く直接的な痛みが走った。

「何が……起こった」

「幼いねえー坊や、そもそもそんな幼い体で私ら殺し屋と同等に渡り合えるとても

本気で思っていたわけじゃあるまいねえーそうだとしたら本当に
お笑い種だよ

まあーいい、楽に殺してやるからさあー恨まないでくれよ」

女は醜く歪んだ笑を浮かべ腕に突き刺さった剣を抜き取ると大きく振り上げた。

それと同時にライネは力なく地面に跪く。

「死になあー!」

女の大音声と共に剣は風を切る音と共に振り下ろされた。

「やめてえええー!」

泣きながら叫ぶキアラ声がわずかにライネの耳に届くが、数秒後には死という

状況にライネは意識が靄のかかったようにうつすらとぼんやりとなり

彼女の声はライネの心には届いてはいなかった。

すべてを映し出す眼を深く閉じ、その瞬間のために再び死を受け入れた。

しかし、いくら待っても剣は振り下ろされない。それどころか女の声がライネの耳に届く。

「な、なんだいあんた！ 一体何者だ！」

同時に剣と剣が触れるような音が漏れ出ると、

「全く……私の書庫に不審な人物が向かって行ったと思えば

幼い子供を大の大人が取り囲みいたずらを始めるんですからね

困ったものですよ。それに一人はライネ様という、一刻はライネ

様ひとりでも

大丈夫かと思いましたがー少しライネ様は幼かった。それに人を切るときは

首が一番楽だと申したのに、足や手ばかりを狙うのですから……

……呆れてものも言えませんでした

ですが……ライネ様にとって良い経験ができたでしょう。

あなた方には感謝しますよ」

仮面をつけた変人であり剣の師匠であるあの男、グレインの姿が突然閉じていた瞼の先に浮かび上がり

そしてグレインはライネの首元ギリギリに剣をつきたて女の剣を止めていた。

「グレイン……」

グレインはライネの顔を見るやいなや仮面の奥から鼻で、フン、と笑った。

「何を命のやり取りの最中にのんきに話してんだあー！」

その時始めて、ライネは真剣を使うグレインの姿を目撃した。

「これが命のやり取りですか……あなたも殺し屋にしては格下のようなだ。

貴方がた程度の使い手に時間を浪費するのも面倒です。いっそ花のように散りなさい」

グレインが僅かに剣を宙に震わせた瞬間、女の首は胴体から離れ、声もなく赤い雨を降らせながら

力を失うように胴体は地面に転がり頭部は崖下へと消えた。

ライネはその光景を表情ひとつ変えずに見上げていた。

死神だった頃、人の死に際を幾度もなく見てきた。

上半身だけの死体や肉片となって消えた死体。首や手五体を切り裂かれた人間

を幾度もなく。だからこそ、ライネはその光景を禍々と見る事ができた。

背けることも目をそらすこともなく、しかしキアラは違う、お姫様で

純粹で、自分よりもずっと幼い……彼女にとってこの光景は

将来ずっと目に焼き付いてしまいかもしれない。

ライネは咄嗟にキアラの方を見る。しかしキアラはその場に深く倒れ気絶していた。

ライネは安心するように胸をなで下ろすと……フツとあの女の言葉を思い出す。

「そ、そういえば父上が危ない」

しかし、グレインは表情ひとつ変えずに笑いながら言葉を返す。

「フツフツ、この程度の殺し屋、彼らを守っている影ならば王の目を汚すことなく

瞬く間に終わっているでしょう。心配することはありません。それよりも……」

その日、ライネは医者の方に連れられ、腕の手当を受けた。

そして……それから10年の月日が流れた。

エルデラ王国。王都エルドラ

魔道学園エルドラシスの教室に白銀の髪を風に揺らせ、外の景色を眺める青年の姿があった。

第四話：孤独な王 後半（後書き）

少年編が終了致しました。次回から青年編に入りたいと思います。

第五話：学園生活

木造の机が列をなして並び春風はるかぜがどこからか桃色の花卉を乗せユラユラと舞い込んだ。

太陽の日差しを禍々と浴びる腰のあたりまで透き通るような白銀の髪を立てかけ上下を黒と白で統一された

学園指定制服着こむ絶世の美青年が呼びかけられる声と共に重い瞼を開いた。

「ライネ〜おめんとさん。三年最後の魔道テスト見事に断突ドベだ。いやぁー嬉しいねえー」

運動能力容姿共に恵まれあらゆることに万能な君がどういうわけか魔法だけは全く使えないときている。

まぁー俺はそっちのほうがいいと思うけど、てかそうであったから俺はお前の友達であり

心友になれたんだ。いやぁーほんと入学した時はお前の美形を見て殺したくなったよ。アハハ

でも魔道士の授業で何一つできない姿を見たらそんな気持ち吹っ飛びしまった」

後部の席に座っていたライネに正面から赤茶色の髪を風に揺らせ、赤色の眼で笑いながら覗き込んできた男に

ライネは大きく欠伸をすると、男を見据えて霞のかかった声で言葉を発した。

「クレイル……毎回毎回お前は俺の哀れな魔道士の才を念仏のように聴かせるために

俺のところに来てるのか？ 目覚めが悪いっいたらありやしねえーよ」

クレイルとはこの学園に入学して以来の友であり心友である。

クレイルはイネル村と呼ばれる村で生まれ、幼い頃から偶発的に魔法を発動してしまう

世間で言う偶発者^{グロム}と呼ばれる魔方陣無しでの魔法を自動発動という能力者だ。

その能力のコントロールを学ぶためクレイルはこの学園に入学したのだ。

クレイルの他にも学園には偶発者が数人いるがクレイルほどに力をコントロールできる者は

数少ないだろう。しかし偶発者は発動とコントロールが出来なければふとした感情の高鳴りで

街一つ簡単に破壊してしまう恐ろしい能力だ。だからこそ他国では偶発者の首に対し懸賞金を

掛けたり、国自体が軍を動かし虐殺することがあるのだ。しかしエルダール王国の属国は

偶発者を保護し、エルレラ王国魔道学園エルドラシスに入学させる力の制御の仕方を教えている。

これはエルレラ王国に生まれ。魔道学園創設に携わった五賢者が一人、ロード・エネルギーの残した

制御法と呼ばれている。エネルギーは生まれながらの偶発者であり森の片隅で生きていたという。

しかしあることがきっかけで森を離れ、街へと出向いた。そこでは偶発者が暴走し街一つ

火炎に包み込まれようとしていた。それを耳までかかる灰色の髪を纏ったエネルギーがそつと偶発者に

触れ耳で囁くと、偶発者は力を抑える事ができたのだという。そしてエネルギーは偶発者の前で

意識の思うまま望むままにコントロールし炎の這う街を一瞬で消化したという。

其の後エネルギーの力は国王たちの目に止まり国に存在した四人の魔道士と共に学園を作り

そこでエネルギーの知恵が偶発者ために使われるようになった。今ではその弟子たちが

この学園の教師を努め生徒たちに知恵を継承している。

「クツフフフ、これでお前の評価がまた一つ下がったな」

奇つ怪な笑を浮かべ、かん高い声を上げるとライネの肩を二度ほど叩き体をくるりつと反転させ微笑した。

「どんだけ俺の心を踏みつけるんだよ……俺はガラスの心の持ち主なんだよ？」

もう少し俺をいたわってだな」

「は？ えーつとどこにガラスの心を持った痛いけな子がいるのかな？」

教室を見渡すようにクレイルはわざとらしく振る舞う。

「あのなあーお前の目の前にホラちゃんというだろ？」

ライネは白い髪を手でかきながらそう口にするるとクレイルの目を見据えた。

クレイルはどこか頬を赤らめ、すぐに視線を窓の外へ移す。

「お前の顔をマジで生物兵器だよな」

「は？ それは嫌味？ それとも俺の顔が人様を殺せるとでも思ってるわけ？」

「ならあれだ、お前の方をさつきからずつと見てるあの娘、目を見てニコツと笑ってみろよ」

きつと倒れるから」

クレイルが教室の扉近くで群がる女子層に指を指すと鼻声でそう口走った。

「そんなわけないだろ？ 見てろよ」

ライネはゆつたりとした仕草で彼女たちのいる方向へ目を向け一人の女生徒と目があつた途端に

ニコリと紳士スマイルを浮かべた。

「あれ……なんで？」

ライネは何度も瞬きをくる返し扉の外で突然奇声を上げた後倒れた少女を見つめた。

「だから言つたろ？ お前の顔は女子にとって刃物よりも強力な兵

器だってな……マジ死ね」

「何？ 最後なんか死ねとか言つてなかったか？」

「いや……言つてないよ……」

あからさまな態度でクレイルは顔背け頬をふくらませその声を履いた。

「お前はそれでも心友か？」

「ああー俺はお前の心の友だぜ！」

「……」

しばらくの沈黙の後、校舎に高らかに鐘の音色が反響した。

学園で最もライネが嫌う授業――魔道実技授業。

それぞれの適正に合った魔法の扱いと魔方陣を創りだす練習をする授業である。

入学して三年、ライネは未だ初歩の魔法すら発動できない状態だった。

「ライネー！ いい加減下級魔法ぐらい使えるようになってくれないか？

一応ここ魔法学園だし……なあー本当は出来るんだろ？」

様々な魔法が行き交う大広場、地面は緑色に育った芝生が並び、岩や池、木々があたりに広がる

魔道実地場の片隅で魔法を発動できず棒を振り回すライネに先生が野次を飛ばす。

それを聞いてか周りに展開していた男たちが小言でぼやき始める。魔道実技が嫌いな理由は2つある。まずはじめに魔法が使えない哀れな姿を他人に見せることだ。

そして二つ目はこの嫉妬の念にかられた男たちの痛い小言だ、しかしその言葉は

ライネに聞こえないように小さな声で生徒たちの間で語られる。

本当に小さな声、虫の息ほどに小さな、しかしライネはそれを聞

きとつてしまう。

ライネの五感はそのそれを超えているのだ。

耳打ちするように小さな声で生徒たちは口ずさむ。

「王族の中で魔法を使えない人間がいるなんてこの学園に来るまで知らなかったよな？」

あの万能なライネくんが魔法を使えないって言うその時までさ」

「いいじゃね？ 王族で美形で身体能力も頭も、すべてに恵まれた神の子みたいな

やつにも悪い面はあるってことがわかってさ」

寄り添うようにして群れをなす生徒二人が口ずさむ言葉をライネは浅い表情で

聞き入っていた。

「そうだ、ちよつと派手なの見せてやるか？」

「派手なのつて、それなりの魔法になるんじゃないの？ 危なくない？」

「大丈夫だつて、あのライネくん以外のやつに放てば魔方陣展開して自分の身くらい守れるだろ？」

「だがなあ……」

「まあー見とけて」

「ちよつと待つ」

生徒の一人が息を吸い込み、一呼吸置くと、大きく声を轟くようにして言い放った。

「我を源に集まりし魔力よ、空間を冷氣と共に変革せよ」

『氷空連』

一人の生徒が空中に手を走らせると、生徒の反対側にいる生徒に高濃度に圧縮された魔法が放たれた。

それはライネに魅せつけるようにして派手に発動された。

暖かな春風を突如冷氣が包み、芝生を白く凍てつく大地へと変え、空中に数本のつららに似た槍が構成され

音もなく加速した。

「バカ！ 何やってんだ！ そんなもん突然打ってくんじゃねえ！」
生徒は慌てるようにして空中に手を走らせ、二重に魔方陣を展開させる。

「ッつ！」

男の作り出した魔方陣に練り込むかのように凍てつく魔法が空中で一瞬止まった。

しかし受け止めた生徒ではそれを完全に捌ききることはできない。魔方陣が徐々に崩壊を始め、男がズルズルと背後へ魔法に押されるかのようにして下がる。

「ちよつとやりすぎたか？」

放った本人は頬を手でかくかのようにしてその光景を見入っている。

「コラァー！ 何やってんだ！」

教師の声がどこからか漏れ出ると、突如放たれた魔法が向きを変え、方向を変えて

放った本人へとまっすぐ加速する。それを見た男は顔を青ざめ額に汗し、足を走らせると、

「ちよ、やば」

男は体を翻し、右へ体を転がし自ら放った魔法を避ける。

だが、男の後ろではライネが立ち尽くしていた。

しかしライネはそれを避けようとする素振りを全く見せない。

当たれば確実的な死、ライネはそれを見つめ、面白いものを見るかのように眺めるだけで

ライネはそれを避けようとはしない。ただじつと接近する鋭利な攻撃を見つめているだけ。

「バカ！ 何やってんだ！ 避ける！」

周囲の男たちが叫ぶようにしてそう言い放つがライネはそれでも動こうとしない。

ライネにはわかっていた。目の前に現れるであろう人物の事を、そしてその者は向かってくる

攻撃をなぎ払ってくれるだろうということも。

ライネの視界に一瞬黒服の制服を着込んだよく見知っている男が現れ

言葉もなく前方に迫る冷気の層を灼熱の業火でなぎ払うと。熱気と共に男が声を上げた。

「つたく、何やってんだ？ お前死ぬ気か？」

「おいおい、お前なんか来なくても俺は避けられたぞ？」

「嘘つけ！ あれだけ接近してきた攻撃をどうやって避ける気だよ！」

「えっと、あれだ。剣で一刀両断って感じ？ でやればたぶん防げた」

ライネにもわかつている。あの距離で剣にも手を付けず何もせず立っていた

あの状態で逃げる方法はない、逃げるなら放たれたその瞬間に逃げているべきだった。

しかしそれをライネはわざとしなかった。それはライネの前に佇む男の焦り顔を見るためだった。

「お前の顔面白いなあー」

ライネが続けてクレイルにそう呟くクレイルは少し怒ったようにライネの頭を二度三度と軽く殴る。

「ライネ君、反省したか？ ああん？」

「反省したよー」

クレイルの睨むような視線にライネは笑顔を満開して嬉しそうに答えた。

その日、魔法を放った生徒は三週間の自宅待機と授業以外での魔法発動を

卒業まで使用してはならないように強制印を食らい先生たちの生徒への評価も一桁下がったという。

それから一月後、二枚の手紙がライネの元に届いていた。

ランプの穂のかに暖かな光が闇に包まれた空間をそつと照らし
手紙の封をナイフで切り取るとライネは椅子に腰掛け、中身を確
認した。

「・・・・・・・・」

しばらくの沈黙の後、我に返るかのようにもう一枚の手紙を開封
する。

「親愛なるお兄様へ、私は一ヶ月後、晴れてお兄様と同じ魔法学園
に入学が決まりました。

待っててね兄様――」

ライネはそつと嘆息すると、

「あの二人が同時に同じ季節に入学と転入をしてくるのか……
」

本の欄列する個室に置かれたさほど柔らかくもないベットに倒れ
かかると、目を深く閉じた。

窓の隙間から月夜が溢れ、夜風がガタンつと扉を押し開き揺れる。
埃と古ぼけた匂いのおふれる空間でライネは再び考え事を口から
吐き出すようにして声音を履いた。

「四年生から学園が騒がしくなりそうだな……あいつもっ
と綺麗になつてるのかなあー」

第五話：学園生活（後書き）

青年編に突入です。文章の改善と処罰の重さをわずかに変更いたしました。

第六話：入学式 前半

暖かな風が桃色から純白に色を変えた花卉を乗せ、校舎に甘い香りと共に降り注ぐ。

それはまるで花たちが新入生たちを歓迎するかのよう満開の花を咲かせていた。

それらの花を見上げる者や校舎を眺めるもの、それは人それぞれだった。

白銀の長く靱やかな髪を額で2つにわけ、新たに割り当てられた窓際の席で顎に手を添えて

新入生の表情を伺うようにして外の景色を眠気の覚めぬ目でライネは眺めていた。

「ライネ……三年前の入学式の事は覚えてるよな？」

背後から掠れかかったクレイルの声が漏れるとライネは振り返りクレイルの目を見据えて、

「ああ、そりゃーあんだだけ派手にからかわれたからな、忘れようにも忘れられないさ」

三年前の入学式、それは……普通の学園ではありえない過激な入学式だった。

あの頃も桜のように満開に咲き誇る花卉が新入生に花の甘い香りを漂わせ校内に引きこむかのように

して花は空を舞っていた。ライネはユラユラと揺れる花びらを手に取りフツと息を吹きかけると

白い花びらは手の平から離れ、再び空を舞う。

ライネは会場に続く道をしばらく進み、かなり年季の入った木製の扉の前に佇むと、

緊張の息を深く吸い込み、ゆっくりと扉を押し開いた。

扉の先には無数のシャンデリアが天井にかかり、ホールのようにして段々になつた会場が広がっている。

ライネは会場に置かれた指示板を便りにその足を進めた。

会場は穂のかにシャンデリアの光が橙色たいたいいろに輝き、窓のないほの暗い空間を照らし

うつすらと見える足場を便りに進むこと数秒、複数の新入生が最も下に位置する席に

背を椅子に任せ座り込んでいるのがライネの眼に写りこんだ。

ライネは音も立てずに空いている席に座ると、眠るかのようにして目を閉ざし、

心を沈め、時が来るのをじっと待った。

それから幾分か時間が経過し、ライネの耳に老いた老人のしゃがれ声が響くと

一瞬目を開き、再び目を深く閉じる。

入学式や卒業式、それらの長つたらしい話をまともに聴くものはどれだけいるのだろうか

否、優等生であろうと、何であろうと生徒とにとってはそれはつまらない老人の戯言なのだ。

ライネは心底の内ですら思っていた。

それから再び幾分からたった頃、老人が立ち尽くすその場所から手を一度叩くような音が漏れ出ると

会場が突然暗闇に覆われ、続くようしてどこからか青色の閃光が空に交差し飛び交い

空中で跡形もなく消えていく……

「な、なんだよ？ 歓迎の魔法パレードか？」

新入生の困惑する言葉が溢れかえる暗闇に閉ざされた会場に突如光が戻るかのようにしてシャンデリアがオレンジ色に輝くと会場を穂のかに照らしこんだ。

しかし暗闇が明けると、ステージに立っていた老人が首に剣を当てられ、

周囲には魔方陣を空中に走らせる黒いローブを身に纏った異質な存在が四方に展開していた。

その中の一人がステージに立ち、高らかに剣を空にかざす、

「この会場は俺たち、アリー又盗賊団が占拠した！ 理由はここに
いる糞爺を殺すためだ」

会場は一瞬沈黙が溢れ、新入生たちが不安な顔浮かべると、周囲
に立っていた教師と思しき

男がフードの男たちに向けてか高い声を上げた。

「お前たち何者だ！？ ここは魔道学園だぞ？ 生徒はともかく我
々は上位魔道士だ。」

ここでの勝手は許さん」

男が空中に魔方阵を展開しようと空に手を走らせたその瞬間、魔
方阵無しで

フードの者から火炎魔法が男に加速し、空中に漂う埃を赤く変貌
させると

魔方阵の展開すら許されず男は壁に叩きつけられ動かなくなった。

そして辺りにいた教師と思しき存在はフードの者たちに次々と魔
法を放たれ床に伏せていった。

黒い穴の目立つ服を纏ったステージ中央に佇む者がフードの暗闇
から鼻をのぞかせ

軽く笑うようにして声音を履く。

「これでわかつたろ？ 俺たちに齒向かった者はそこらじゅうで倒
れている教師さんたちと

同じ末路をたどることになる」

ライネはその光景を眺めながら、不意に腰に手を回した。

しかし、目当ての物は腰には無かった。

普段のライネならそれは我が身から離さずそこにかけてあるはず
だった。

ライネはここへ来る道中、宿舎として3日前から開放されていた
自室の机の上を

頭に思い浮かべると、ハツとしたような表情を浮かべ額を手の平
で押さえ

うなだれるようにして地面にひどく霞んだ声音を口に開く。

「あーそういえば学園内では刃物持ち込み禁止だったけ……」

再びライネは視界に広がる光景を目に入れると、しばらく考えこむようにして黙り込んだ。

「フフツ、いい子だ、それではまず初めに俺たちの第一目標だったこの爺の命もらうことにしよう」

ステージに佇む司令塔の役割を果たしているフードの男がステージ上で首に剣を構える

フードの者に視線を向けると、ゆっくり頷きながら、

「殺れ」

男がよく通る声でそう言い放つと、フードの者は躊躇なく老人の胸元を突き刺した。

傷口から大量の血が溢れ、剣が突き刺さったまま老人は地面倒れこみしばらく痙攣するように

ピクピクと体を震わせると、血溜まりを作り出し動かなくなった。

ライネはそれを見た瞬間、違和感を感じた。

彼らには殺気がひとつも感じられないのだ。

人を殺す時、人は知らず知らずのうちに相手に対し何らかな気を放っている。

仕草や表情、言葉の音量まで、それらは何かしらの思いがまとわりつくものだ。

しかしフードの者たちは全員が全員殺気を放っていない。

ライネは殺気や人を殺すという気配にかなり敏感に反応するよういつの頃からかになっていた。

それはグレイルとの稽古の影響もあったが、最も大きな原因は8歳の頃あの月夜の晩に出会った

殺し屋たちとの死闘が原因だろう。

ライネは新入生が目を送るステージではなく倒れこんだ教師たちの方向に鋭く目を凝らし

探るようにして見据え

薄暗い空間で小さな動きも見流さない様に神経を尖らせ、常人離れした視力で

空間を見渡すと、倒れこむ教師の喉元や体がわずかに動いている事を目にする

ライネは何かがわかったようにうなずき深く目を閉じ（派手な歓迎会だなあー）と心の済で思う

時の流れるのをライネじっと待った。

ライネをよそにフードの者達は新たな行動に移った。

「へへへ、まだ殺し足りねえーなあー。やっぱり爺さん一人じゃーもの足りねえー

そうだ、今日は入学式だったな？ 新入生を一人ずつ殺すことにしよう。

まず初めはその女だ、連れてこい」

男がそう言うと、複数のフードの者が男が指さす女子生徒の腕を掴みステージの舞台へと

連れ出し、跪かせると老人の腹を剣で突き刺したフードの者が女のそばに立っていた

フードの者から剣を受け取り、鞘から剣を抜くと、大きく空に剣を構える。

女子生徒の表情は恐怖に表情を歪ませ、ポタポタと大粒の涙を流しながら

震えた声で助けを求めるようにして叫んだ。

「嫌、嫌、嫌……死にたくない、嫌だよ……こんなところで私はまだ何も……」

彼女の声が会場に響きく、しかしフードの男は容赦なく言葉を発した。

「殺れ、一瞬だ」

大きく振りかざされた剣は加速し、彼女の首を胴体から切り離そうと振りかざされた。

「ああーもうみてらんねえーよ！ やめえろ……！」

声が一瞬空間に響くようにして聞こえると、赤茶色の髪をした男が一心不乱に魔方陣無しで

剣を振りかざす男に向けて小さな火炎を放った。それは一瞬一瞬加速を繰り返す

剣を振りかざした男に直撃し、男は壁にたたきつけられ動かなくなる。

それが引き金だった。一年生は各々使える限りの魔法を使用しフードの者たちと対峙したのだ。

その光景をライネは欠伸をしながら眺めていた。乱闘騒ぎとなっているのは会場のステージの周りだけ、

後方では上級生たちが明らかに何か劇でも見ているかのような冷静にその戦いを眺めている。

「痛そうだな……あの人達」

新入生は手加減という物を知らない、フードの者たちは次々と壁に激突し、動かなくなっていく。

それから数十分乱闘は続き、フード側の立っている人数が減少していくと、倒れこんでいた

先生が、突然立ち上がり、乱闘の起こる空間に青色の膜を魔方陣から放ち、一切の魔法を

その空間から使用できなくすると、死んだように倒れていた老人がネタばらしをし

過激な入学式は幕をおろしたのだ。

そしていま、三年前、完膚なきまでにフードの者たちを倒した学生たちは後者側に立ちこの先起こるであろう

悲劇に怯えていた。

「だよなあー俺らもあの時見たくボロボロにされるのかな？ あはは……」

「かもな、これも4年生になれば訪れる運命ってやつだよ。あのフ

ードの中が四年生だと

聞かされたあの日からな」

ライネは黒板に筆書きされた赤色の文字を眺めながら頬を二度ほど描くと嘆息した。

黒板には『四年生の諸君、これより楽しい楽しい一年生歓迎行事
一年生に自信と勇気を与える、名付けて作戦名悪戯好きの老夫婦
を開始する。』

詳しい資料は君たちの机に配布しておいた。諸君らの幸運を祈る』

「四年生ってこんなものを入学式にの時配られてたのか……
俺に逃げたくなつたんだか、ライネどう？」

「そりゃー逃げたいけど、ほらここ見てみるよ」

ライネは机にひろがる赤色の資料の中から、大きな文字で大々的に書かれた文章に手をやると、

「入学式当日、鐘のなる前に四階美術室に四年生は集合すること、
なお逃げ出した者は

全科目の今年の単位を0とします。なお、部屋から出ることすら
危うい重病にかかった者や

骨折、歩くことがままならない者は例外とする。って事だ」

クレイムは額に汗しながら目をパチパチと瞬かせ、自ら机に頭を
たたきつけ始めた。

「俺は、痛いのに、嫌！ だから、ここで」

凄まじい速さで机に頭を叩きつけるクレイルにライネは艶のある
声で呆れるように口を開いた。

「お前なあー自分から負荷でを負ってどうするんだよ？ それじゃ
あー意味ないだろ？」

男ならビシツと俺と一緒に一年生のために死のうや」

どこか肝の座つた言葉をクレイルに言いかけるとライネに冷たい
視線があたりから注がれる。

「やめてくれよ……死ぬとかさ」

「そうよ、仮にも私たちは四年生一年生なんか遅れは取らないわ

！きつと………」

重い淀んだ空気が同級生たちの間で行き交う中、ライネが釘をさすようにして言い放つ。

「刻限がそろそろ近づいてきたよ？ 早く行かないと今年の単位がパーだ、俺は行くけど」

君らは自分の意思で決断すればいい」

ライネは部屋に沈黙を生み出すと、教室の扉を開き廊下を抜け、階段の登る。

第六話：入学式 前半（後書き）

急いで書いたもので脱字があるかもしれません
後半は20:00に更新いたします。

第七話：入学式 後半

四階美術室 - - 昼夜問わず光の挿し込まない暗闇の広がる教室。生徒の間ではランプ教室とまで呼ばれ、ランプの光がなければまともに授業ができない

奇妙な教室、それが設計ミスで生まれたのか意図的に作られたのかそれを知るものは誰もいない。

ライネはそんな暗闇の空間にランプを片手に壁に腰掛けていた。部屋には無数に欄列する机が並び、壁にはランプの光で照らされた気味の悪い顔の老人たちが描かれた

絵が映り込み、中央には一目見れば本物と間違えてしまうほどの鮮明に彫られた彫刻が五人列をなして並び

それぞれ違う笑を浮かべて踊っているかのようにその場に立ち尽くしている。

刻限の鐘の音が校舎に重い音となって鳴り響いた。四年生全員が美術室に集まり、

穂のかに輝く無数のランプが鐘の音と共にどこからか吹き込んできた風に生徒が持ち得た

ランプすべてが死神の吐息のように音を上げながら消し去られるようにして一斉に消えていった。

しばらくすると、油の匂いがランプの消えた器から漂い、視界は暗闇に包まれる。

「こら！ 誰よ！ 私の胸を触ったのは！」

「ああーそれ多分おれだわ」

「最低！ 死んじゃえ！」

「痛てえええーって俺違うぞ」

「え？ あれ？ ほかな人叩いちやった？」

暗闇の中、困惑するようにして人の声があふれかえると、ライネは壁に背を預け、寄りかかるようにして

その光景を細めで眺めていた。しかし一切が暗闇、映り込むものは無く音だけが人の位置を知らせていた。

不意にライネは壁向こうから聞こえる僅かな時計の針のような力チカチといった音を耳にした。

それは徐々に音を変え、騒音のように空間に轟いた。

ライネは思わず壁から一步離れ、その様子を伺うようにして振り返る。

その瞬間、地面が振動し、壁が動くような音が周囲から溢れ出ると、暗闇に陽光が差し込んだ。

昼夜問わず暗闇の教室、その空間に光が差し込むことなど今まで一度もなかった。

そもそも、この場所には窓がない。だが、ライネの前に広がる光景には光が数箇所から差し込み

部屋を照らし、空間に光をもたらししていた。

「何よこれ」

「おいおい、何が起こったんだ？」

あふれ出る声は雑音となって部屋に響き渡る。

ライネも広がる空間の壁を手でなぞりながら全体を見渡した。

空間には壁一面に広がるボロボロの黒いローブが掛けられ、中央には

彫刻が消え、代わりに無数の小さな青色の石が加工されて埋め込まれたネックレスが

ローブと同じ数ほど置かれ、天井には大きく赤色で『使いなさい』とだけ書かれている。

「どんだけ手の込んだ秘密基地なんだよ。それにこんな場所にあるローブがあったのか……」

確か魔法拡散陣の植えつけられたローブだったけ？」

クレイルが誰よりも早くローブを身につけ眺めながらぐるりと体を回転させ周囲の人間に見せつける。

魔法拡散能力とは他者の作り出した魔法をある程度拡散してくれ

る特殊な魔方陣のことだ。

発動してそのまま使うこともあれば服や剣などに自分の魔力を流し込み創りだすこともある

魔力の弱い魔道士が植え込んだ拡散陣はその術者が粉碎できる程度の拡散陣しか作れず

術者がより強い魔道士ならば、その術者に見合った拡散陣が展開される。

つまり、術者が弱いければ植えこまれた陣の力も弱くなり術者が強ければその服をまとった者が

いくら無能でも体を魔法から保護してくれるということだ。

全員にローブとネックレスが行き渡ると突然部屋が再び振動し、中央付近に上と下へ続く階段が突然現れた。

その通路にはそれぞれ番号が大きく書かれている。

上には1下には2つとしかしライネはその番号に全く見覚えが無い。

何かの意味があることは明らかだが、それに関係するものが部屋には見当たらない。

「あのさあー俺この番号の事、心当たりがあるんだけど」

一人の男子生徒がローブのポケットから赤い紙を取り出し全員に見せつける。

「悪役その6は闇池クワヤを会場に入り校長が手を鳴らすのを見計らって発動せよ。1、ってさ。たぶんこれが

番号なんだと思う、それになんか昔の四年生も校長が手を叩いたとき空間を暗闇にしてたし、

たぶんみんなにも同じような物があると思うんだ」

男子生徒の声で全員が古ぼけた穴の開いたローブに手入れ、探り始めた。

ライネも同じように手ローブの中に入れると、紙のような感触が指先に触れ、

それをつきとる、それは何十にも折りたたまれた赤色の紙、紙を

全開にして

眺めると、石ころのように紙をにぎり、懐に収める。

「俺は1だ」

「私は2ね」

交差する言葉と共に、ライネは2の下りの階段へと足下ろす。

一歩進むごとに、木製の階段はしなり音を幾度となく鳴らせた。

ライネは気にすることなく、うっすらと光が差し込む細い通路を進む。

数十分後、細い通路では空間に漂う冷えた空気を諸共しない人の密集でできた

熱気が2の階段を進んだ者たちを襲っていた。

ポタポタと滴る汗が通路の暑さを物語っている。

幾数の蜘蛛の巣と埃を乗り越えて、ようやくライネは扉らしい扉を見つけ、素早く扉を開いた。

扉の先にはシャンデリアが複数点在し光を放っている。

ライネの前に伸びる埃が蔓延する通路には小さな手すりがかかけられ、空間の端へとつづいていた。

ライネは扉をくぐり、更に辺りを見渡した。

手すりの先に広がる空間の下では無数の人々がホール状になった場所の席に座り込んでいる。

ホールの中心には老人が一人杖をつきながら口を何度も開いては閉じ開いては閉じを繰り返している。

ライネはその光景を伺いながら通路を進む。

間もなくして、空間に老人のパチンっという手を叩く音と共にホール全体が

暗黒に包まれた。それに構わずライネは通路の端に到着すると、扉を開き下へと続く階段を駆け下りる

それと同時にホールのあちこちから青色の閃光が上がる。

それは3年前と全く同じ現象だった。暗闇に閉ざされ、専攻が上

がり、困惑する生徒たち、

三年前と違う所があるとしたら、それは騙される方が騙す方に変わったつということだ。

ライネはホールに入る前に置かれていた偽物の剣を腰にかけ、閃光の光に一瞬映りこんだ

老人の背後を取り剣を首元に突きつける。

閃光が鳴り止んだ頃・・・突然空間に光が灯る。それと同時にあたりに散らばっていたフードを着込んだ

四年生が各々配置についた。

ライネの前には困惑する表情を浮かべる新入生たちが不安を表情に表し座っている。

「この会場は！ 我々ロインド盗賊団が占拠した！ 理由は簡単だ！ 俺たちはこの腐れ爺に恨みがあるんだ。それも殺したい程にな。

さあー始めよう楽しいパレードの時間だ」

それはよく聞き及ぶ声、クレイルの声だった。

クレイルが手を大きく宙にかざすと突然あたりの教師たちが倒れこむ。

そしてフードの者たちが皆赤く染まる剣を片手にその場に立っていた。

毎年様々な展開でこの入学式は始まる。教師が全員殺され、老人が殺され、

そんな茶番が毎年繰り返される。そしてライネはクレイルの声をと共に

脚本通り・・・

「さてさて、教師諸君は死んだ、次は老人の番だ、多くの仲間がお前によって

殺され、倒れてきた。それを今ここで償うがいい、殺れ」

クレイルは殺気立つ声音でそう履くと、ライネは躊躇せずに老人に首元をえぐった。

大量の血しぶきを空中に放ち、杖を地面にころがせもがき苦しむ

ようにして

硬直し、動かなくなった。

しかし、ライネはそれに表情ひとつ変えない。

ライネは知っているからだ、この剣がおもちゃで人など葉っぱさえも切ることの出来ない

偽物だと、老人もうまく演技しているが、血の色が近くで目視すれば本当の血ではないことは

一目瞭然なのだった。

ライネは軽く剣を振り偽物の血を拭いとる。

「フフフツ、忌々しい老人は死んだ、だが、殺し足りねえー仲間の命は一つや2つじゃねえー

そうだ、今日は入学式とか言う奴なんだろう？ なら新入生がいるはずだ」

クレイルは迷わずステージ前方に座る新入生を見つけ出し。そして一人の女性とを選ぶと

フードの者たちにステージに連れてこさせ一人の腰に据えられていた剣をクレイルが抜くと

それをフードの男に手渡し、

「楽に殺してやれ、これから、処刑の時間だ」

フードの者が言われるがまま剣を振り上げると、勢い良く振りかざした。

女子生徒の恐怖に歪んだ顔から涙が雨のように流れ出る。

次の瞬間、彼女は目を深く閉じた。

あまりの恐怖で声も上げず、恐怖に怯え体を震わせる。

しかしフードの者の剣は床に刺さり彼女の首をそれていた。

それはしびれを切らす生徒が出てくるまで永遠に続けられる

多くの場合、二度目以降から確実に新入生から魔法が放たれる。

そして・・・

穂のかに照らされた空間に六芒星の魔方陣が浮かび上がり、中央から風と火炎が渦を巻きながら

勢い良く放たれた。激しい風がホールに吹き抜け、剣を握っていた男はホールの端の壁にたたきつけられ意識を

奪われたのか動かなくなった。

毎年毎年それは引き金の役割を果たす。恐怖が勇気へと転換され、魔獣のように

勢いを増した新入生は次々と魔方陣を展開させていく。

「くう、防げ！ 魔法拡散陣を展開させつつ、攻撃だ」

クレイルのよく通る声音は周囲で攻撃を受けていた四年生に響き空中に魔方陣を展開させる。

普段人に指示することなど無いクレイルが今日は人が変わったように

声を荒立て、適切に支持を送っている。

ライネは魔法の飛び交うその空間で、引き金の役割を果たした新入生を眺めていた。

それは風を纏い火炎を吹き散らし、一歩一歩ライネに近づいてくる。

ライネはその姿に見覚えがあった。

三年も前から顔を見ていない。小さな体でいつも足にまとわりつくようにして

王宮で過ごしてきたただ一人の妹、黄金色の髪を肩まで伸ばし、いつも少し大きめの

ドレスを着たがる幼い少女。そしていま、魔法の飛び交う中少女はあの頃とは

比べ物にならない程に綺麗にそして女らしくなった姿で目の前に現れた。

その面影は正しく王宮に飾られている若き頃の母の絵とそっくりだった。そして

腰まで伸びた長い髪をひとつに纏め彼女は真っ直ぐライネの前に歩みより少女は

声を放った。

「お兄様の通っている学園を汚すことは許しません！ 悪即斬ですわ！」

空中に素早く魔方陣を組み上げていくその様子はライネの妹とは思えないほど

素早くそして誰よりも早かった。

「ちょ、ちよつと待て、俺はエル……」

ライネの体は彼女から放たれた火炎と風をまとった魔法によって強く吹き飛ばされ、背後の壁に叩き付けられる。全身に一瞬熱と体に響く

痛みが走った次の瞬間、ライネの意識はぼんやりと霞み、視点が定まらなくなり

立ち上がるうと下途端に意識が抜きと垂れるかのように抜けていった。

ライネは迫る火炎の魔法を何度も消し去る夢を見ていた。

幾つかの火炎を切り裂くも、それは熱を帯びていなかった。

しかし、ライネはホールの中心で何度も同じ場面を繰り返す

火炎を切り裂く、火炎を放つ人間はどこか懐かしい面影をしていた。

ライネはそれがいくら切ってもいくら思い出そうとしてもそれは思い出せなかった。

ライネにはわかっていった。これは夢、夢は永年と繰り返される現実ではないものだ、

再び放たれた火炎をライネは切らなかった。ただ受け止めたのだ。無数の熱なき火炎がライネを包み込む。

その瞬間、視界が歪み、空間が崩壊し始めた。

すべてが崩れたとき、ライネは白い柔らかなベットの上に寝転んでいた。

消毒液の匂いが溢れ、ベットのそばで長い黄金色の髪を乗せて一人の少女が

眠っている。

「エルシア……………」

ライネは重い体をベットから起こすと優しく彼女の頭をなでるようにして触ると

僅かに微笑んだ。ベットにかけられた白色のシートをエルシアに羽織らせ

彼女を抱き上げるとソッとベットの上に乗せ、月夜に照らされた窓越しからライネ空を眺めた。

第七話：入学式 後半（後書き）

ひとつまとめて書いといると8000時を超えてしまったので後半前半に分けて更新することになりました。

流れ書きをしてしまうと文章が曖昧になってしまいますね。

今度から何度か手を加えた物を更新いたします。

2011/08/14更新するめどが立ちました。19・00更新です

第八話：馬車の中の転校生

ガタガタと揺れる馬車の中、少女は浅い眠りから覚めるようにして目を覚ました。

その面立ちは水のように清らかで透き通るような純白の肌を持ち、若草色の眼が

更に彼女容姿を美しく見せる。何よりも両耳から肩にかかる橙色の髪に後ろ髪は編まれ

どこか高貴な空気を纏っていた。レイデル・キアラ・クレールは尋ねるようにして前に座り込む

メイドに声をかけた。メイドは表情ひとつ変えず、それに応じる。「ロール、私はどれほど眠っていた？」

艶のある声でキアラが声音履いた。両手に小さな茶色がかったカバンを手に、同じ制服を着こむ水色の髪がよく似合う

青色の瞳の彼女が細目にして声を上げた。

「姫様がお眠りになっていたのはほんの15分ほどです。昨晚のパイティで

お疲れになられていたのでしょうか。後数分ほどで学園に到着すると思われます」

表情のない彼女はどこか寂しげで、何者にも自分の心の内を見せない。

そんな彼女にキアラは軽く笑みを浮かべ、「そう……あとロール、今日から学園に通う一年間、私の事はキアラって呼んでちょうだい。

同じクラスと同じ学年に入るのですもの、姫様なんて呼ばれてたら私は

学園生活を満喫できない気がするから」

ロールは冷めた表情で左右に首を振った。

「それはできません。私はメイドとして姫様の身の回りの世話を仰せつかっています。」

メイドは主に絶対な忠誠を尽くすものです。姫様は姫様、私どもはそう呼ばせて頂きます」

「メイドが主に忠誠を尽くすって事は主の命令ならなんでも聞くってことかしら？」

どこか何かを企んでいるような表情をキアラは浮かべ、メイドの青色の眼を

視線をそらすことなく見つめると、そう言い放った。

「それは……」

口ごもるようにしてロールは黙りこんだ。

キアラは目を見開きその瞬間を狙っていたかのようにすかさず小さな狭い馬車の中で立ち上がり

細い指で指さすようにしてロールに声を上げた。同時にドンッと室内に音が漏れる。

「なら命令します！ 主人の命令は絶対！ 今日からロール・エレットは私の事をキアラと呼ぶ

それを破った場合、即座にメイドの任を解き、貴方にはあの村に帰ってもらいます」

キアラは頭に走る痛みを表情を引きつらせながら片手で撫でると再び席に座り

ロールを見据えた。

キアラは知っている。彼女は決してこの提案に逆らうことができないのだと、

6年前のあの日、彼女は雨の降り注ぐ豪雨の中、まだ熱の残る瓦礫の広がる

村でドラゴンリースに保護された。ドラゴンリースとは大型の竜よりも数が多い

小型の竜を飼育し、竜にまたがり戦場を駆ける国の重要な戦力の一つである。

そんな彼らに保護された彼女は王宮へ連れられメイドとして働くことになった。

彼女が王宮へ連れてこられて幾日かたった頃、彼女はメイドたちの間で浮いていた。

仕事もせず、口も聞かず、死んだような目をし毎日毎日メイドの服を着ては

空を眺め、食もろくに取らず彼女は日に日にやつれていった。

そんなある日、キアラは気まぐれを起こした。

毎晩毎晩王宮の広場で空を眺めている周囲では気がふれてしまったのでは………と

噂されている少女をキアラは王女つきのメイドとして引き上げたのだ。

それは本当に気まぐれだった。411回目となる夜の散歩の道中満月に照らされ悲しげに泣く

彼女の声と、震える背中を目にしたあの日、キアラは彼女の事を知ったのだから。

それから数日は彼女とは一度も口を聞かず、しかし食事だけは無理やり食べさせた。

それほど彼女は体が衰えていたのだ。そしてそれから三ヶ月、彼女が初めて言葉を口にした。

「どう………して？」

途切れ途切れの声は豪華に彩られた王女の部屋に響き、キアラの耳に入った。

キアラは彼女を鏡の前に立たせ、けっして安くはないであろう櫛を彼女の背丈まで伸びる

水色の髪に当て髪を慣らしていた時の出来事だった。

鏡の先で僅かに言葉を発し、片目から涙を流す彼女を見て、キアラは心の底から

彼女の笑顔を取り戻そうと思った。それはひび割れたガラスを手のひらに乗せ

パズルのようにゆっくりと時間をかけてそれでも確実に慎重に積み上げていく

気の遠くなるような時間が必要だろう。それでも、取り戻したいと思った。

窓辺から月夜がわずかに溢れる青白い空間で幼いキアラは微笑みを浮かべ、

「私は決めたの、貴方に笑顔に戻すって」

鏡の先で片目から涙を流す彼女はどこかそれはありえないと言わんばかりの表情を浮かべ

黙りこんだ。それから彼女は何も口にしなかった。しかし日に日に彼女は

言葉を聞き、今ではまともに話を会話をできるようになるまでになっっていた。

馬車の中、ロールは戸惑うかのようにして普段は浮かべない照れているような

表情で頬を赤く染めると、視線をキアラから逸らし馬車の床に目をやった。

「卑怯です……反則です。キアラ様は……」

掠れかかった声でロールはそう声を上げた。

キアラはどこかそれが嬉しくて、それでいて、赤く頬の染まるロールを眺め

「それでよし！」

微笑むようにしてキアラは笑った。

キアラは心の内で表情以上に喜んでいたのだ。

(そんな顔ができるようになっただね……ロール)

相変わらず視線をそらすロールを眺め、キアラは再び微笑んだ。

その場の空気が幸せに色を変え、心地のよい空間が広がる。

それから幾分か経過した頃、馬車は花ちり誇る坂道を登り、とある学園の前でその動きを止めた。

そして、音もなく馬車の扉が開かれた。

先に降りたのはロールである。黒い色のスカートを手を風に揺らせ、馬車の階段を降りると

馬車の横しに立ち、視線を前にやると姿勢よく立ち尽くす。

キアラも続くようにして馬車を降りると、よく見知っている老人の顔がキアラの前に現れた。

「レイデル様、お久しぶりでございます」

豊満に伸びる、白髪が縮み上がった背を追い越して地面い横たわり膝のあたりまで伸びるヒゲを伸ばした柔らかい表情の老人。

キアラはこの老人にあつたことがあつた。

幼少の頃幾度か顔を合わせただけだったが、その表情には

嘘も偽りもない、あの男と同じ匂いを感じた。だからこそ、キアラはこの老人が

好きだつた。

僅かな時間しか言葉を交わしたことがないのに、彼女は老人が

ごく僅かな友であり頼りになり得る存在だと思つた。

「レジル様、おかわりないようですね」

「ホツホツホ、レイデル様はみるみるお美しくなりますな。わしがあと40歳若ければ

口説きにかつたかもしれんのおー」

王宮ではレジル・アレイスターは有名だつた。

今は小さく縮み上がった老人だが、かつては眼を見張るほどの美少年だつたという。

それに比例して魔道士の才も国一番と呼ばれ、五賢者の一人としても有名だつた。

「そんな、若かりし頃のレジル様には私程度の娘、釣合いませんわ」

冗談交じりにキアラはにっこりを微笑むと、真顔になつたレジルが「いやいや、わしはマジで」

そこで、横しに立っていたロールが手をつき喉を鳴らす。

「ウツウン！ レジル様、キアラ様を口説かないで頂きたい。もし

もその気にもなられたら

国の民が嘆きます」

それを聞いた瞬間、キアラはロールの足を二度三度と他人に悟られぬように踏みつける。

「ロールちゃん？ 冗談はほどほどにね？」

レジルはすでに還暦を迎えた老人、かつて美少年でも今は今、老人に恋心を抱くほど

月日を過ごしてきたわけでもない。ロールはそれを真顔で冗談無しに言いかけるもんだから

キアラは乙女心に従って強制口封じにかかったのだ。

そして・・・

二人のやり取りを知ってか知らずか、レジルが額に汗し、懐からハンカチを取り出すと、

溢れる汗を拭き取り、しわがれ声で言葉を吐いた。

「あーそろそろ、校長室に行こうかのおーいささか時間が迫ってきておる」

第九話：二人の女

「お兄様ー！」

黄金色の髪を引っさげて少女は勢い良くライネに向かって突進した。

ライネはそれを見事に受け止めると、くるりつと体を回転させ、少女の勢いを殺す。

整った彼女の顔を覗き込むようにしてライネは声音を上げた。

「やあーエルシア」

「兄様の匂いだー」

彼女はライネの体を強く抱きしめ、目を閉じると何か懐かしい物にでも

触れているかのように嬉しそうに笑っていた。

ライネもそれを見て僅かに笑を浮かべる。

「朝からお熱いねえー次は僕の胸に飛び込んでおいで！」

ライネの妹は僕にも妹のようなモノだ、さあー」

クレイルは鼻の下を伸ばし大きく手を広げ危険な匂いを体から放出していた。

女には危険な男を感覚的に嗅ぎとる能力があると言われていた。

エルシアはそれを感じ取ったかのように

猫のように威嚇し、ライネの背後へと体を半分隠し、クレイルに警戒の眼差しを送っている。

それはまるで幼い頃の妹の姿そのものだった。ライネはひどく懐かしくなり、再び僅かに微笑んだ。

「どうして兄様がこんな男の人とお友達なのですか？　こんな・・・」

エルシアは顔引きつらせ、まるで汚物を見るかのような眼差しをクレイルに送る。

「おいおい、なんだよその人を小馬鹿にしたような視線は、俺は一

応魔法授業ではクラスのトップ3に並ぶ

男だぜ？ それに一応これでも将来期待されてんだけどなあー」

クレイルは頭を掻くようにして片目を閉じて言うと、

「いくら魔法ができたって貴方のような女を泣かせそうなタイプは女の敵です！」

「いや……別に俺は女性を泣かせた事は一度も……」

クレイルの視線が徐々にエルシアから離れる。

「目を逸らすという事はつまり貴方はどこかで女性を泣かせたって事ですね

やはりあなたは女の敵です！ 最低な男です！」

急所を突かれたかのようにクレイルは怯み、後ろへ二歩三歩と下がると

突然早口調になり地面に視線が動く、

「もういい、俺は自分の殻に閉じこもる事にした。今日は誰とも話さないし

口も聞かない！ ライネ、お前ともな！ 兄妹そろって俺をイジ

メやがって

ライネの馬鹿！ アホ、お前なんか質の悪い女に捕まって浮気して毒を盛られて

死んじまえ！」

クレイルは一方的にライネに言いかけると、扉を大きく開き教室の中へ消えた。

「……クレイル俺は何もしていないぞ」

呆然とライネはそうつぶやくと、右側から声が漏れでる。

「兄様振られましたね。いいじゃないですか、あんな人とお友達なんかなってても

損するばかりですよ？」

困ったような表情でライネはエルシア眺め、黄金色の髪をそっと撫でると、教室の中へと

消えたクレイルを見据えてうつろな声上げた。

「彼は、私にとって大切な友人なんだ。あんな奴だけど、貴族や王宮で偽りの

表情を作り媚びへつらう連中に比べたらあいつは素のまま話せる掛け替えの無い心友なんだよ。

エルシア、いくら彼が嫌いでも、仲良くしてほしい。きっと彼の悪い所よりも

その二倍や三倍良いところが見つかると思うから」

本当に彼は良い友であり心友だった。彼は庶民でライネは王族、決して同等の立場ではない

しかし二人がここまで別け隔てなく心友であれたのは彼の性格が大きく影響しているだろう。

ライネはかつて学園に入学して間もない頃クレイルが語った過去のことを思い出した。

彼はイネルの村に生まれ、そこで偶発者として覚醒してしまう。

それは3歳の頃だったという。村の者たちにはおそれられ蔑まれ、丘の上にある家には毎晩石が投げ込まれた。

食料は畑で取れる野菜のみ、それでもクレイルとその母はそれに耐え生きていた。

野菜を取るときも村の人々は飽きずに石をクレイルに投げつけた。しかしクレイルはいくら痛い思いをしようとも蔑まれようとも笑

うのだという。

それがクレイルの母の教えだから、クレイルは笑うのだという。

母も同じように笑い、いつしか村の人々は彼らに石を投げるをやめていた。

それどころか半年後には魚や肉を届けてくれるようになったという。

ある日その礼をしに村に出向くとクレイルを見るやいなや大勢の大人が

申し訳なさそうな顔で頭を下げ、謝ってきたのだという。

その時も彼は笑い、彼らの事を許したのだ。

彼は最後に言っていた。笑っていれば誰とでもきつと友になれる、
つと

その言葉には嘘偽りはなかった。だからこそ彼とは三年間友であ
れた。

今では様々な暴言をライネに履くが、それが本心でないことをラ
イネはわかっている。

彼は人を傷つけることを酷く嫌うのだから。

「私にはわからないわ……でも兄様がそこまでおっしゃる
のなら……」

「ああ、今はわからないかも知れない。でも、きっと、エルシアに
もわかる時が来るよ」

再び優しくエルシアの髪を撫でると、

「そろそろ時間だ、エルシアも教室に戻ったほうがいい」

「はい」

学園の鐘の音が大きく反響すると、教室のドアが音を立て教師の
挨拶と共に開かれた。

それは昔も今も変わらない風景、しかし今日は教師の背後に二人
の女子生徒が立っている。

一人は橙色の髪の少女、もう一人は水色で短髪の髪の少女。

教卓の前に教師が佇むと、二人の名前を縦に綺麗な字で書き上げ
ると、ボタンつと教卓に手をつける。

それと同時に生徒たちの視線が教師に注がれる。

「これからお前たちに二人の転入生を紹介する。黒板を見ての通り
ここにおられるレイデル・キアラ・クレール

様はこの国の国王の娘であり次期王女となられるお方だ、顔も何
度か見たことのあるものもいるだろう

これからクラスの一員となるわけだから仲良くするように。後レ
イデル様の左側でカバンを持っているのは

ロール・エレット君だ、キアラ様の身の回りの世話をできるよう
に特別に入学が許可された。

彼女とも仲良くするように、開いている席は………」

教室を見渡すように教師は目をやると、クレイルの座る席のすぐ
隣に目を止め、停止し

指先で場所を支持するようにして声を上げた。

「クレイル君の隣席が2つ空いているようだから二人はそこへ座る
といい」

二人は頷くと、支持された場所へ進み、席を目指す。

橙色の彼女の髪が宙を揺れるたび生徒たちは電流が体に走ったか
のように硬直する。

緊張しているのか普段なら様々な声が入り交じり静けさとは無縁
の教室が

彼女が一步前に進むごとに凍てつく空気に変わっていく。

ライネと彼女との視線が偶然交わった瞬間、二人は軽い言葉を交
わした。

「久々だな、最後に話をしたのは三年前か？」

ライネは柔らかな表情で彼女の顔を眺めるかのように見据えて言
った。

「そうね、三年前祝いのパーティー以来かしら。それにしてもライ
ネは全然変わってないのね」

「変わったる？ 身長とか顔つきとか筋肉のつき方とか」

「いや………変わってない」

「そうか？ 俺は結構変わったって自覚あったのに………」
細い腕を眺めながらライネがそう口ずさむと、キアラは嬉しそう
に笑い俯くクレイルのとなりの席へと座った。

後を追うようにしてロールがライネを前を通過しようとするど、
ライネが再び声を上げる。

キアラにも面識はあったが、目の前に佇むこの女も面識がある。
「元気そうだなロール、相変わらずキアラに無理やりドレスとか着せられてるのか？」

ロールは声に反応するかのように一瞬ライネを見据えると、二人だけが聞き取れる声で口を開いた。

「ライネ様、お久しぶりでございます。幼少の頃姫様とどんな約束をしたのかは存じ上げませんが

姫様をお守りするのは私めの役目、この学園で起こり得る危険はすべて私めが排除いたします。

です。でも貴方の護衛は結構です」

彼女の言った『護衛』とは8歳の頃から続けている、ただ祝いの席などでエルーダル王国に招かれていた

キアラを祝いの席が終わる数時間の間、エスコートし彼女の身の安全を小さな力ながら守っていた頃の事だろう。

ライネは軽い笑みを浮かべ、ロールの目を直接見るようにして声を上げた。

「昔のことだよ、今は君が守るんだろ？ 君が守れないとき守り切れないとき俺は

君たちを助けるために動くよ。俺の力なんてたかが知れてるけどね」

そう言い切ると、彼女一瞬禍々とライネを顔を見据え、頬を一瞬赤色に染めると、顔を

背けるようにしてかすれかかった小声で口を開き過ぎ去った

しかし最後に彼女が何を言ったのかライネには聞き取れなかった。

それから3週間たった頃、一年生歓迎行事の一つ、三泊四日のライグロース島へ学園の船を使い

出向くことになった。ライグロース島とは草木が生い茂り人が住んでいない無人の島である。

それはこの学園創立以来行われてきた伝統行事のようなもので、

主に森や川、自然での生活を体験し

食の大切さや、水の確保の難しさ、そして適用力を身につけさせる毎年過酷な行事となっている。

一年生は複数のグループに別れ、四年生二人と一年生四人でグループは構成される。

出発の朝、ライネは持ち出しが許可された豪華な彫りの入った剣を片手に学園の校庭へと向かった。

すでに校庭には複数の馬車が止まり、生徒たちが乗り込み始めていた。

ライネも同じように馬車に乗り込み、目的の船が停留しているクリーヌの漁港へ馬車は走り始めた。

第十話：ライグロース島 一日目 前編

潮風の吹きぬける海岸線、潮風を真つ向に受け、エルドラシス学園の生徒たちは

それぞれグループを作り、リーダーの名の下に集まりつつあった。六人一組のグループの中、外出用の黒色のローブを纏ったライネが眠気の交じる欠伸をすると

それを注意するかのようになら若草色の髪をした短髪の女が声を上げる。

「ライネ、四年生の君がたるんでどうする？ 我々は学園の最高学年なんだぞ？」

もう少しそれらしい態度をとったらどうなんだ？」

頭を描きながらライネはそれを面倒そうに聞き入ると、

「まあーそうなんだけどねえーこの暑さじゃあーどうにもやる気がさあー」

「お前がそれを言うか？ 汗ひとつかいてないお前が」

確かに熱いが、ライネは汗ひとつかいていなかった。

しかしグループのリーダーであるクロリス・リア・ライネツクの額には無数の汗が滴っている。

クロリスの他にも四人の男女が汗を額から流し汗をタオルで拭いていた。

「そろそろ先生の注意事項の発表がある。顔を引き締めて全員ここで待機だ。」

「わかったか？」

一年生が班長の声に頷き両手を後ろに組むとその場に石像のように立ち尽くす

光景をライネは眺めながら同じように両手後ろで組みどこか脱力したような

表情で視界に広がる海岸線を眺めた。

あたりには他にも複数のグループが存在し、それぞれ整列するよう
にその場に立ち尽くしている。

そして、学園長から注意事項が海岸で一人ほどの高さにある岩
の上から生徒たちを見据えるように

学園長が高らかに声を上げた。

橙色の髪を潮風に揺らせながら手のひらで靡く髪を抑えこむと少
女は老人の声に耳を傾ける。

「これより、三泊四日の辛く厳しい合宿を行うこととなった。一年
生諸君は初めての野外合宿であろう」

先輩を使い、そして生きる術をこの大地で学んでくれることを望
む。そして二年生から三年生の

皆は更に己の魔術を極め、去年よりも利口にそして更なる高みを
目指し精進することを望む。

そして四年生の諸君は学園最後の野外合宿だ、それぞれ個の実力
を存分に発揮し、一年生の目標に

なれるよう誇りを持ち、実力を存分に発揮してくれ。それでは注
意事項について発表することにしてしよう」

長々と続く老人の発表をキアラは眺めるかのようにして見入って
いると、背後から灰色の髪を耳まで伸ばす

メガネをかけた男が声を耳打ちするようにしてあげた。

「レイデル様、この島は初めてですよね？ 何かと不安があるでし
ょう？」

キアラは声の上がった方向に振り返ると、軽く微笑む班長の姿が
あった。

キアラはどこか表情に苦笑いを浮かべるとかすれ声で声を言い放
つ。

「少し不安ですけど、私にはロールがついていますから」

キアラのいる班には特別に三年生が三人組み込めるようになって
いた。

それは学園長の申し出と、教師たちの判断からそうなったのだ。そしてこの組みには学園でも魔道授業に置いてトップ1つと名高いキルス・ロア・ガルネーシャが班長を務めている。この男は学園では何人もの女を泣かせてきたとされ多くの女たちから

警戒されている要注意人物だとクラスの女生徒に聞いたことがあった。

「そうですか。しかしレイデル様の盾がいくら程の实力を持っているからわかりませんが

この島での知識に置いては私のほうが多く存じております。わからない事や不安に思うことがあれば

私に相談なさるといいでしょう。魔物や毒に関しても幅広い知識を持つているこの私に」

「そうですね。私共はこの土地の地理をよく存じていませんし。魔物や有毒植物に対する

対象法は存じていませんから貴方を頼ることもあるかもしれませんね」

どこか不満気にキアラの横で二人の会話を聞き入るロールが頬を膨らませると、キアラはわずかに

微笑み、ロールの手を握りしめる。

キルスは二人の姿を眺めながら、やれやれっという仕草を見せると声を上げた。

「そろそろ、校長の挨拶も終わるでしょう。これからよろしくおねがいします」

「ええ、よろしく」

キアラは彼に心を奪われる事はなかった。女子の間ではキルスと言葉を交わすと、甘い誘惑と

現役魔道士と引けを取らない魔術の才を持った学園一の期待株、そして美形という女神の加護まで

受けた全てにおいて完璧な彼に心奪われるのだという。

キアラは彼の顔を見ても、いくら優秀だと言っても彼に魅力を感じなかった。

彼の言葉には感情がこもっていない。彼の声音には孤独と悲しみが満ちている。

才能あるものは理解を超える力ゆえ、常人にある程度距離を置かれるものだ。

彼を本当に理解できる人間はおそらく彼と並ぶ天才の他にいないだろう。

しかしどこかそれは王族に生まれたキアラと近い存在だとも思えた。

老人の声が止まり、岩から降りるとあたりの人間が一世に海岸の逆側へ移動し始めた。

「どうやら校長の挨拶が終わったようだ。我々も森の中へ、島の中樞を目指そう」

緑生い茂る森の中、少女は頬をふくらませどこか不機嫌な表情を浮かべ

一年生の先頭を歩いていた。クレイルはそんな彼女を尻目に嘆息を漏らした。

「はぁーなんでよりもよってあいつの妹と一緒にグループになるかなぁー」

考えこむときや何か嫌な事があれば、片目を閉じて言葉にする癖がクレイルにはあった。

「クレイルどうした？ 元気がないぞ？ いつものお前ならかけずり回って虫やら魔物やらに

ちよつかいをだして大騒ぎになるのに、まぁー僕からしてみれば今のクレイルの方が

厄介ごとに巻き込まれずに済みそうだからいいけどさ」

青色の髪を頬まで伸ばすほのぼのとした庶民顔のリックが声をク

レイルの隣で声を上げた。

リックは治癒魔術の成績において学園一と呼ばれている。将来数少ない治癒部隊に配属が決まっております。

学園生活をほのぼのと過ごしている。彼の人柄は温厚で、決して人を悪く言わないので有名だった。

そして数多くの友を持ちそんな友の一人がクレイルだった。

「あれだよ、後ろにいる女、あれはライネの妹なんだが、ライネとは性格が歪んでるっていうか

俺のことを女たらしとか言うんだぜ？ ひどくないか？」

リックは空を眺めながら微笑むと、

「そうだねえー魔道授業でトップ3の実力を持つてるクレイルはトップ1の彼れと比べて

影薄いもんねえー容姿も二枚目でいい男なのに、女の子たちは全部トップ1に持っていかれてるもんねえー

それにトップ2のクロリスちゃんは女の子からも男の子からもどちからプロポーズ

されてるって噂もあるし、実力あるのに全く女の子にモテないクレイルがどうして女たらしなんだろうね

「やっぱり顔かな、二枚目の顔が行けないのかな？」

「顔なのか？ やっぱり俺の顔がなんかいやらしい表情で女を見てしまうからなのか？」

仕方ないだろ？ 男はいい女を見れば鼻の下だって伸びるし、だらしない表情になるってもんだ！

それが男の性ってやつだ！ そうだろリック」

「うんーどうかな？ 僕はそんな経験ないからわかんないや」

「お前って女とか興味なさそうだもんなあー」

「興味？ それはどんな意味？」

曇り空から視線をリックはクレイルに移すと真顔でそう言った。

「もついいや」

「そうか？」

再びリックは視線を空に移すと、つぶやくようにして口を開いた。

「雨が振りそうだね。多分これは豪雨になるよ」

「それならどこか水除になるような場所を探さないとな」

リックには雲の動きやその場の温度、空気の流れ、それらを基準に
気象を読むことができる。それは100%当たる。彼が雨が降る
といえは雨が振り

雷雨になるといえは本当に雷雨になる。晴れるといえは晴れ、曇
るといえは曇る

確実的な予想、気象を読むことは彼の特技なのだ。

学園の誰もが彼の予想はハズレの無いことを知っている。

だからこそ、クレイルは一年生を引き連れて足を急いだ。

第十一話：ライグロース島 一日目 後編

「ライネ！ お前も手をかせ！」

豪雨の中、甲高い声と雷の唸り声が雨の音に混ざりながらも空間に反響した。

ライネは雨を凌ぐかのように大木の根に腰を据え小さな枝を鋭く尖らせるようにして

削りながら雨に打たれ緑色の得体のしれない存在と死闘を繰り広げる少女にやる気の無い脱力した声で言葉を返した。

「あのさあー一人で事足りるとか言ったの班長だよね？ そもそも魔法使えばこんな奴

楽に倒せると思うよ？ なんてまた剣技で挑む必要があるんだよ」
片手に握る細くそれでいて鋭利な刃は大きな鼻を持った目のない魔物の首を

切り裂き緑色の液体が空に雨と共に降り注ぐ。更に剣を宙に震わせ次々と魔物の命を絶やしていく。

「私は今日この森に入る前に決めたのだ。攻撃系魔法は使わずこの三日間耐えしのぐと、それが

私を鍛え、不屈の精神力と更なる進歩へつながるからだ。わかったなら手伝え！ さすがに

私だけではこの数は面倒だ」

二頭の魔物の手足を切り裂き地面で絶命していく姿を眺めながら彼女は言った。

剣術、格闘技、それぞれ普通以上の成績、魔法に関しては学園でも将来を期待され

雷をもととする魔法の破壊力は現役の魔道士に引けを取らないほど圧倒的な力を持ち。

将来国の魔導騎士部隊に配属が決まっている世で言うエリート。魔法を使えば一瞬で魔物たちは黒い灰に変わってしまうだろう。

ライネは数本の鋭く尖らせた枝を数本持ち寄ると、足元に長いそれだけでいて丈夫な

左右に紐を結んだ物を手に取ると軽いため息をつく。

「はぁーさっさと終わらせよ」

片手に手を加えた木を握ると、紐に鋭く尖らせた木を紐に重ねる、そして枝と縄を同時に

後ろへ引きながら片腕に力を込める。

「班長ーちよつと伏せててください」

彼女は声に反応するようにしてライネの方向に視線を移した。

彼女は一瞬硬直すると即座に地面に伏せる。

それを見計らってライネは複数あたりに存在する魔物に対して手に握るそれを放った。

加速した枝は一頭の魔物の首を貫き舌を地面に垂らしながら息が来ず絶命した。

ライネは更に腰に据えた枝を次々と魔物たちに放っていく。

それは首を捉え場所同じ箇所を貫いた。

「ふうーどうやら全滅したようだ」

先ほど間で道満ちていた魔物たちの殺気が消えたことをライネは確認すると

全身の力を抜き出すように息を吐き無数の死骸が並ぶその場所を眺めた。

無数の魔物の死体、緑色に染まる血溜まり、彼女はそんな場所で雨に打たれながら

も立ち上がり剣を左右に振るうと鞘に剣をしまっ。

「んじゃぁー班長後は任せるわ」

ライネは再び大木の根に腰をすえ、数本の枝をナイフで削り始める。

するとライネの寄りかかっている大木の裏側から数人の男女が複数の果物や水を背負って

全身ずぶ濡れになりながら一人が声を上げた。

「先輩―果物と水の調達終わりました」

ライネはそれを横目から眺めていると水の容器を持った男が驚くようにして声を上げる。

「何ですかそれ？ 魔物……ですよね？ 先輩がやったんですか？」

それは一年生。数十分前、水と食材探しに出かけさせた四人の一年生。

攻撃型の魔道士でこのあたりに生息する魔物なら四人いれば対処できるであろうっつという判断で

クロリスが支持したのだ。基本的に魔道士は敵と接触して戦うことはまずない。

遠距離から魔方陣を構築し、発動する。その力は魔道士の魔力と深く関係しており

魔力が高ければ高いほどより高濃度な魔法を発動できる。魔力が少ないものにはそれと

同等の魔法しか発動しない。それがこの世界の常識である。だからこそ予め

班に入る生徒の成績を聞いていたクロリスは四人でなら、っと判断したのだ。

事実彼らはこうして戻ってきた。

「いや、私も数匹は殺ったが矢が刺さっているのはすべてそこに座るライネが殺ったものだ」

「矢つて……軽く数えて二十匹くらいはいますよ？ こんな数相手にしかも

確実に首元を狙って当ててる。やっぱ先輩方はすごいです！」

「ああー私もライネがこれほど弓の扱いに長けているとは知らなかった」

関心するようにクロリスは艶のある声を口にする。

その場にいた全員の視線がライネに注がれるが、ライネは目をそらすかのように腕枕をすると

顔を地面へと傾けながら低い声音を履いた。

「そんなに見ないでくれるかな？ 小っ恥ずかしいからさ……」

それからしばらくの後、クロリスがとんでもないことを言い出した。

相変わらずの豪雨の中、クロリスは白い肌を雨に打たれながら片手を強く握りしめ

高らかに声を上げる。

「よし！ 今日はいいつを食べるぞ！ 大丈夫だ血は緑色だが、生き物には違いない。

肉のつきもそう悪くわない。ということであれからした準備をすることにする。

ライネと一年生はそれを手伝うように！ さあー始めるぞ！」

緑色の液体が散乱する平地、手足が無残に切り取られた魔物の死骸。

剣に深く染み付いた緑色の血痕、それらすべてがライネの食欲を殺していく。

グツグツと煮えたぎる鍋の中、無造作に投入された魔物足が熱湯に茹でられ

上下に浮きは沈み浮きは沈みを繰り返して緑色に染まった鍋の中を巡回する。

その光景はまさに身の毛のよだつような光景、ライネはゴクリと喉で唾液を飲み込み

それを眺めながら再びゴクリと息を飲んだ。

「クロリス……本当にコレ食べるのか？」

一年生も同じような言葉を並べクロリスに質問する。

「だ、大丈夫だ、ほら嗅いでみる見た目は少し酷いが香りはなかなかの……」

クロリスが鍋から漂う匂いを直接鼻で吸い込むと、表情を歪め作

り笑いを浮かべ全員から顔を背け

食べ物を入れる容器に次々と鍋汁を注ぎこみ始めた。

「ちよ、ちよつと待て！ 俺はその………果物だけでいいよ
てかその鍋いらん！ てか入れるな！」

「好き嫌いは良くないぞ？ ほら、ライネには少しみんなよりも多
めについていやる」

クロリスの表情にはどこか悪意が満ちていた。

それは表情を見るだけで明らかだ。口をへの字に曲げ、気味の悪
い笑みを浮かべる。

そして容赦なくライネの器に死に汁が注ぎ込まれた。

どこかそれはマグマのようにぶくぶくと泡をたて、器の中で煮え
たぎっている。

「あのさ………なんかすぐくやばそうなんだよねコレ……
・

やっぱり食べるのよさない？」

しかし彼女は左右に首を振りそれを拒否する。

「さあー男なら男らしく死んで来い！」

「それってつまりアレ？ 俺が一番最初の実験台になれと？」

彼女は頷く。仮にも王族にここまで言う女は珍しい。

ライネはそう思いつつも手に握られた得体のしれない食べ物を心
を決め一口。

口に投入されたそれは、瞬く間に口の中に広がりそれを無表情の
まま飲み込んだ。

「どうだ？」

一年生も心配そうにライネを見つめていた。

しかしライネは無表情のまま数秒が経過し、そして……

「う………」

「う？」

「う………」

「う？」

「旨いアー！」

ライネは口に広がる甘みとほのかに香るハーブのような香りとなにより柔らかかな

肉に感動し、それがもともと何だったのかを忘れ、器に注ぎ込まれた汁を犬のようにたいらげた。

それを見ていた一年生もクロリスも同じように一口すると凄まじい速さで器に残る汁一滴すら

たいらげ、そして満足げに息を吐いた。

「ふうーよし！次は木の上にテントをはる！ 道具を持って私について来い！」

甲高い声と共にクロリスが器を収め、森の頭上に視線を送る。

しばらくするとパシパシと一つの大樹を叩き、ここにする、っと声を上げ、ロープをくるくると

手で回転させながら勢いがついたところで頭上に伸びる大きな木の枝にロープをからませた。

それは四年前からこの森に来ると必ず行つた光景だった。

不思議そうに一年生たちがクロリスに声を上げた。

「クロリス先輩、どうしてテントを木の上に作るんですか？」

テントなら地上でもいいと思うんですけど」

「ああ、それはなこの森は夜になると大型の魔物が森を徘徊するんだ。

その時に魔物にテントを踏まれたそこで終わりだ、それに魔物におそられることだってある。

人は寝起きが一番弱いからな、とにかくそういった点でこの森ではテントは大樹の木の枝に作る事が

基本なんだ。君たちも来年になればこれらすべて自分の力でやることになる。だから

この合宿中しっかり我々の行動を観察し、学んでくれ」

一年生は関心するように頷くとライネを方を一瞬眺める。

しかししばらくすると溜息をしてクロリスに視線を移した。

ライネの行動など見ても何のメリットも無いって一年生が判断したのだ。

ライネはそんな一年生を細目で眺めながらもクロリスの投げた縄に捕まり誰よりも早く枝の上に昇った。

風の吹きぬける枝の上は周囲の光景を見渡すことができた。

緑色に染まる森、雨の降り注ぐ大地、暗闇になりつつある空、ライネはそれを眺めながら

そっと口走った。

「そろそろ夜が来るか、また夜は去年と同じく眠れないのかなあー」この島来ると必ずといっていいほど寝不足になる。

それは夜な夜な大型の魔物が徘徊し、森全体に叫び声と足音を轟かすからだ。

校長いわくそれも精神を鍛える要素の一つじゃ、っとは言っているがライネにはただの騒音にしか聞こえない

精神をそれで鍛えられているのかそれも疑問だ。

ライネはそんな事を雨の降り注ぐ空を眺めながら思うと枝に背を預けその場に座り込んだ。

虫の声と魔物たちの雄叫び、それらが響く月夜の広がる闇、そんな中

ライネは大きな枝の上で剣を構え前方に振りかざした。

それと同時に前方から鉄のこすれる音が漏れる。

ライネの先にはクロリスが佇み、剣を構えライネの剣を振り払う姿が映り込む。

ライネは悩んでいた。悩みながら彼女に剣を振るっていた。

事の始まりは数分前に遡る。一年生が眠りについた頃ライネは空を眺め

雨の止んだ月空を何も考えずぼーっと見据えていた。

そんな時、背後から気配を感じ、ライネは振り返ると、気配の先には

彼女が立っていた。月夜に青色の瞳を反射させ、輝かせながら彼女はその場に立っていた。

そして彼女は言った。

「ライネ、確かお前は剣術の授業や体術の授業で毎回2位の成績を残していると聞く」

私も少しは剣の腕には自信がある。何よりお前の力を少し知る必要がある。

そこで今日ここで、今から私と戦ってくれ。全力で向かってきても構わない」

「ああーめんどいからパスー」

即答だった、それは有無を言わさない程の即答。

しかしその程度でクロリスは諦めたりはしない。

「ほおー私の命令が聞けないと？」

どこか突き刺すような視線でライネを見据えるクロリス。

「だって今から寝るところだっていうのになんでわざわざ汗をかくようなことをしなくちゃならないんだよ」

それにここから落ちたらたぶん即死だよ？ 危ないだろ？」

「私は落ちない。大丈夫だ」

「……いや、俺が落ちるかもだよ？」

「その時は手厚く弔ってやる」

頬を指でこすりながら呆れるような表情でライネは声音を履く。

「弔うって……俺一応王族んだけどなあ……俺が死んじやうと

いろいろとまずいでしょ？ 特にこの学園の先生とか……この行事を

創りだしたあの爺さんとか、何よりお前が」

彼女は人を見下すような目でライネを見つめ、冷たい絶え入るような声で言葉を漏らす。

「案ずるな、私が全力でもみ消す、私も一応は国の一端を担う家計の者、

例えお前が死のうと私は全力でそれをもみ消す」

彼女の黒い部分をライネはその瞬間感じ取った。

「あれだよ、つまり俺には逃げるか戦うかの二通りの選択しかないわけか」

「そのとおりだな、さあーどうする？ 逃げるか？」

「あのなあー逃げるかってお前がいる方向に縄があるんだぜ？ つまり俺は

逃げれないってことだ、それはつまり戦うしかないってことでもある。

ああーつたくやるしかないじゃん」

「よし、決まりだな？」

彼女はそう言うつとすかさず剣を抜いたのだ。

それが数分前の出来事、そして数分間彼女と剣と剣でやりあった

結果

彼女の剣の腕がどれほどのモノかも太刀筋も把握した。

彼女は弱い、と言ってもエルーダル王国の100人隊長くらいの實力はあるだろう。

しかしライネにとってはそれは弱い、数年間あのグレイルと戦い続けた

ライネにとって彼女の剣は恐怖することも準備運動すらならない。本気を出せば数秒でこの戦いは終わるだろう。

しかしその後がライネは恐ろしかった。

彼女も自分の剣を信じ戦いをいので来たのだろう。

しかしそれにあっさり勝利してしまうと彼女の誇りを傷つけないおかつこれからかなりやりにくくなりそうだと。

だからこそライネは悩んでいた。

このまま数十分間、彼女の剣を防ぎ、わざと負けるか、今ここで一瞬で彼女剣を弾き、戦いそのものを終わらせるか。

ライネは決断した。

(めんどくさい………けどやっぱり勝つのは………)

数十分後、ライネの剣は弾かれ、大樹の枝に突き刺さる。

「負けた……」

「ふん、なかなか粘ったが、私にはかなわなかったようだな」

どこか満足気な表情を浮かべその場に座り込むと額に汗をしながら息を整えるクロリス、それを細目で眺めながらライネはため息をつくと

突き刺さった剣を抜き取り鞘へ収める。

そのまま一年生が眠るテントへ向かい手を背後へ手を振りながら
声を履いた。

「俺はつかれたから寝る」

ただそれだけを言い残し、ライネはテントの中へと消えた。

クロリスはそれを眺めながら胸を押さえ、勝ち誇った笑を浮かべると

立ち上がり、クロリスもテントへと向かった。

第十一話：ライグロース島 一日目 後編（後書き）

更新します。

第十一話：国王の命令（前書き）

500字ほどしか書いていませんがご了承ください。

次回は今と同じように3000字以上で書いて行きます。

第十一話：国王の命令

豪華な装飾の施された服を纏い、お辞儀と共に部屋を後にする男二人をグレイルは冷たい眼で見据えた。

するとそれに怯えるかのようにして二人の男は慌てて部屋の扉を閉ざした。

グレイルは軽くその光景を笑い、腰掛けていた白色の壁から体を起こすと大きなベットの前に立ちつくし

咳を何度かするベットに横たわる男に声を上げる。

「陛下、あの二人が最後ですか？」

「そうだよ、この国の汚れ、貴族としての義務を放棄した愚かな貴族レイゲルド家を今日潰す、領地を汚し民を苦しめ、己の欲のため大勢の人間を民を国民を殺した。国として王としてその存在は許すことはできない。」

もはやレイゲルドを庇うものはいない。何年もかけてやつの証拠を集め

貴族たちを説得してきた。それが今日報われる。グレイルよ

お前に命ずる、エルーダル王国ジルガツクの街及びにその周辺を領地とする

レイゲルド家頭首レイゲルド・ゲルネ・ルイゲル公爵を捕らえ

財産すべて没収しろ。抵抗するようなら……」

「わかりました。それでは私の部隊を連れていきます」

「わかった。後これが貴族全員の公爵捕縛の礼状だ、持っていけ」

グレイルはベットに横たわるこの国の王から礼状を受け取ると部屋を後にした。

それから間もなく、グレイルは数百の兵士を連れ、馬を走らせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5930v/>

魔力無き王族の物語

2011年8月29日21時36分発行